英国春秋

２０１２年　春号
ISSUE　No.２０
発行　英国日本人会

はじめに

地に落ちてなお咲き続ける紅椿が庭の一画を華やいだものにさせています。今年の春は少々遅めでしたが、それでも確実に花々の開花と、あの悲しみの記憶を伴いやって来ました。あれから一年、丁度、春号の編集中に受けた東日本大震災の悲報でしたので、この稿を書きつつまたまた心が沈みます。亡くなられた方々のご冥福を願い、被災された方々には「がんばって下さい」としか言いようのない心苦しさはあるものの、それは遠く離れて住んでいる我々の祈りでもあります。

文集『英国春秋』も回を重ね、途中休刊期間がありましたが、お陰さまでこの春号を持ちまして２０回目の発行を迎えることになりました。

今回、特別寄稿いただいた方々は、

今村朗氏　（在英日本国大使館・総括公使･総領事）
小出重幸氏　（インペリアル　カレッジ客員研究員）
坂次健司氏　（公認シティガイド）
春井久志氏　（関西学院大学・経済学部教授）
松本靖彦氏　（東京理科大学・准教授）　（アイウエオ順）

の諸氏です。会員の皆様もふくめ、忙しい中『英国春秋』に投稿いただいたことを心より感謝いたします。今後とも文集続行にご協力いただけますようお願い申しあげます。

＊　＊　＊　　も　く　じ　　＊　＊　＊

はじめに		１	
「民の力」元年	高階玲子	２	
着道楽	クーパー矩子	３	－　４
空飛ぶニワトリ	古沢いくこ	４	－　５
イギリス随想４題	今村朗	６	－　８
在留邦人	佐山菫子	８	－　９
大人のロンドン散歩	加藤節雄	１０	－　１１
会員となって思うこと	ヴァンダースケイフ日出美	１１	
英国春秋俳壇　ふるさと	バロウ典子	１２	
子猫	エリオットつやこ	１３	
ユーロ危機・ギリシャ危機の行方	春井久志	１４	－　１６
ディケンズ特集			
ディケンズとロンドン	松本靖彦	１７	－　１８
ディケンズ少年と「タイム・トラベル」	坂次健司	１９	－　２１
「間違いの喜劇」、「ジューノと孔雀」	小川のり子	２２	－　２４
五つのポエム	田村陽子	２５	－　２７
英国の食文化を見直す	小出重幸	２８	－　２９
そんな！	津久井安子	２９	－　３１
地中海クルーズとカサブランカ	岡村光雄	３２	－　３６
英国春秋あれこれ　『2012 年』		３６	

『民の力』元年

高階玲子

一月に帰国した際、東京・数寄屋橋にある「東日本復興応援プロジェクト」に出かけた。何か、被災地からのものをロンドンに届けたいと思ったからだった。
店内には幟や大漁旗、凧などが飾られ、現地で作られた食品や花瓶・お皿などの民芸品、Ｔシャツや小物が並んでいた。作ったのはどのような方なのだろう、状況は大丈夫なのか。アルバイトだという若者が気持ちよく対応してくれた。責任者の一人と思われる若い女性も丁寧で落ち着いていて好感度・高。
私は去年の３・１１前後東京にいたし、九月には四日かけて被災地を見て回り、よそ者ながらそのインパクトの大きさに打ち震えた。つい「大変でしたねえ」と声をかけたら「はい、タイヘンでした。でも皆様のおかげで頑張れます」と笑顔で答えてくれた。「ご心配ありがとうございます。私たち、大丈夫ですから」と。私もつい、「大丈夫ですよ、ね！」と言ったとたん、胸がこみ上げてきて、うるうる・・・そして、「二人でここでウルウルしててもしょうがない、また！」と、勢いよく切り上げたのだったが、短い出会いの中で感じた、苦労を潜り抜けた人の持つ芯の強さと相手を思いやるあたたかさが今も残っている。
力強く生活再建に立ち向かっている人々の奮闘ぶりもたくさん見聞きした。若者たちが親の仕事を引き継いで立ち上がっていた。大学進学をあきらめ自分の育った所で生きる決心をした青年もいた。外からさまざまなアイディアで支援する人たちの活動も知った。
東京のある老婦人はウェブを通じて仙台の蒲鉾会社を再建する若いオーナーを資金的に応援し、オーナーから報告が届くのを楽しみにしていた。「今日、初めて笹カマを作りました」「板カマも作れるようになりました」というブログを読みながら老婦人は仙台に思いを馳せる。新しい人間関係が着実に育っている。
私は、福島の原発事故を完全な第三者の立場から調査・分析し記録を残そうというＦＵＫＵＳＨＩＭＡプロジェクトの催しに参加した。
科学者や弁護士やビジネス関係者などからなるグループで、三月には成果を出版するそうだ。アメリカのスリーマイル島原発事故の調査でも新事実が明らかになったのは、自主独立の調査ゆえという歴史がある。日本でもこうした民間の自主検証は今、数を増している。放射線計測も市民の手に寄る所が大きい。
しかし、一月十七日の、阪神淡路大震災一七年の際に聞いたＮＨＫのラジオでは、経済評論家の内橋克人氏が、あの時の復興計画が被災者や住民の希望を十分に考慮せずに実行された結果、町並みは一見して見事に整備されたが、住んでいた場所に戻って来られない人も多く、昨年までに孤独死した方は九百人を超すと話していた。「今も復興住宅で暮らす人は四年後に立ち退きを迫られている。高齢者は特に行く所がないのです」「十七年後の今も人間復興はまだ果たされていないのです」と。
そして日本を発つ直前に聞いたニュース。
「政府対策本部、原発事故、議事録なし」
ああ、また、か！「民」が必死で生活を立て直そうとしているこの時に、「民」と「為政者」との距離の、なんという遠さ。
イギリスでも折に触れて日本の復興状況がレポートされるが、ＢＢＣは「日本の強さは、コヒーレンス（結合の緊密さ）である」と分析している。（政府は入っているのかな？）
駐日英国大使のデイビッド・ウォレン氏も、二月初旬ロンドンで行われた報告会で、大惨事が重なったにも関わらず大きなパニックに至らなかったことを高く評価している。
一九九五年がボランティア元年になったように、二〇一一年が、「民の力」元年になったらどんなに嬉しいことかと思う。

着道楽

クーパー　矩子

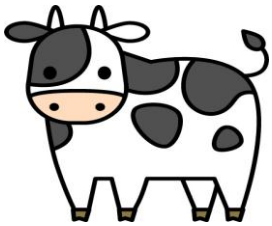
私の盆の窪の下 にほくろがある。「首のうしろ、服でかくれる所にほくろのある人は、衣装に不自由しないってよ」と母の友人から聞いた事がある。衣食住の食·住で不自由だった時もあったが私は衣に関しては恵まれていた。

女学校を出て外科医になりたかった母は親に反対されて、その代わり文化服装学院に行くのを許された。洋裁は勿論、和裁編み物と何でもこなせたので、終戦後物の無い頃から三人の子供に手作りで服装を整えてくれたのだ。私の小学校入学の際には鹿の子編みのクリーム色のセーター、セーラー衿は朱色、こげ茶の胸あて付きズボンだった。つつましい暮らしの中でも学校の遠足、学芸会、お正月には必ず新調の服を用意してくれた。白い毛皮衿の紺のオーバーとか、衿にポンポンのついた白セーターと黒と赤のチェックのジャンパースカート、妹とおそろいの花を編みこんだオールドローズのカーデガン等お気に入りだった。そして春秋の遠足にはフエルトの帽子、夏だったら木綿のセーラーハットと帽子も添えられたので今でも私は帽子が好きである。

中学生になって吉祥寺のハーモニカ横丁にある輸入雑貨の店で初入荷のデニムズボン(折り返しはチェック)とか大胆な白いパイルのオーバーブラウスを手に入れて粋がったりした。母が“映画の友”や“スクリーン”を毎月取っていたので衣裳デザイナーという職業があるのを知ってかっこいいなと思ったものだ。グレース・ケリーの着ていた白いドレスでウエストに濃緑の刺繍のあるのに心をうばわれてスケッチしたりしたのもこの頃だった。その頃同級生から「ジュニアそれいゆ」を見せてもらい中原淳一や内藤るねのデザインが洒落て目に写り、真剣に眺めたものだ。

学校を終えて大手町の商社に入ると私立学校卒のお嬢さん達と肩を並べるようになった。当時景気の良かった部門であったから春秋の旅行、夏は海の家行き、忘年会、新年会と続いて仕事と共にせわしなかった。その行事の前には先輩のお姉様方に連れられて銀座のデパート巡りに出かけいろいろと助言されつつ各自の服を選ぶのである。会社では野暮ったい制服を着せられている反動かみな派手な服を選んでいた。カジュアルなスーツ、ツーピース、ブラウス等がどんどん増えていった時である。結婚相手を見つける為に入社した人達は結婚が決まると振袖姿で世話になった部署へあいさつ廻りする習わしがあったけれど、そうなれなかった私は終わりの日まで残業して退社した。

会話でも習おうとアテネフランセへ行き始めそのクラスの教師に紹介されて銀座の画廊で働くことになった。場所が銀座五丁目並木通りだから通勤やランチへの行き帰りにお店をウインドウショッピングに費やし、給料日や少しのボーナスが出ると目をつけていたハンドバッグやブーツ等を買った。ある冬の仕事帰り、おニューのビロードのコートを着てすまして歩いていると後ろから“モーオモーン”とわめき声がする。酔っ払いが私に付いてよろめきながら来るので通りかかった人まで笑っていた。尤もそのコートは乳牛と同じ白地に大きい黒のぶち模様だったのだ！あわてて駆けて地下鉄駅へ走りこんだ忘れられないエピソードである。ファッションに関しては装苑やドレスメーキングの雑誌で勉強?したが物足りない私は自分で服をデザインして桑沢デザインに行ってい



る友人に作ってもらう事にした。ボーイフレンドと東京オリンピックのバスケットボールを見に、イタリアのジャージイで肩胸に縞のシフトドレスを着て、成人式には淡いブルーのボレロの付いたワンピースで出かけた。
いろいろな出来事があって日本を飛び出してロンドンに仕事に来た。

親も仕事だからと心よく送りだしてくれたのだが、結婚しそうにもないと思っていた私が結婚することになった。急に日が決まってウェディングドレスを探す暇もなく母がこしらえてくれたピンクに牡丹の花柄という訪問着で式に臨むと、式を取り仕切るスーパーインテンダントが着物に興味を持ってあれこれ質問に答えていたら、二十分近くもキモノ談義となってしまった。無事に式を終えて新婚旅行へと仕度していると、八月末と言うのに一天にわかにかき曇り豪雨に加えてあられまで降り気温までぐっと下がったのだ。「旅に出なくていいよ」という夫に「いいえ出かけます」とシャーロックホームズ風にケープの付いたシナモン色のロングコートに帽子とブーツという姿で駅へ向かったのだった。

さて四十年近くロンドンに暮らしていると生活上自然と物が増えて困る。結婚前に六回、結婚して六回の引越しでその折々荷も片づけたけれど、身の廻りの始末をするべき時と思い片づけ始めたのだが、あいにく私の連れ合いは私の誕生日とクリスマスにプレゼントとして服を何点か選んで買うのが楽しみだと言って一ヶ月も前から探しに行き、「ミッション　インポッシブル！」と時にはハンドバッグやスカーフなんぞまで！

服装はその人の気持ちに添ったもので行き先と天候に合っていれば気分まで良くなろうと言うものだ。これからも体型が変わったりすることもあろうが、センスを磨いて小粋な装いをしたいと思っている。

空飛ぶニワトリ

古沢いくこ

広島から幼なじみが遊びに来てくれた。お天気もいいので庭にデッキチェアーをだして空を見ながら話していた。鳥達が木々の間でさえずっている。ジェイやマッグパイのような大きな鳥は人がいても怖がらないでいる。

私はスイスに数年前に行った時の事を友人に話した。山の中腹まで電車に乗り、下車して少し歩くと村があった。こんな村に有名高級ブランドのお店が並んでいるなんてと見ていると、向こうの方からベルの音が聞こえて来た。２０頭あまりの牛達が通り過ぎて行く。みんな首からベルを下げていた。あまりの賑やかさに、牛達はベルがやかましくて、頭が痛くならないのだろうかとガイドさんに聞いてみた、「牛達はベルを誇りに思っているんです。あの一番大きなベルをぶらさげているのがリーダーですよ」と指さしてくれた。村はずれの家の前庭に、鶏が１０羽ほど遊んでいた。その庭に５メートルほどの木があり、枝を長く広げていた。葉はほとんど無く、鶏たちは羽を広げ飛んで枝に停まったり、飛び降りたりしている。鶏も飛べるんだと、びっくりしてしばらく見ていた。こんなに鶏も自

由きままに、生きていければ幸せだろうと思った。

友人は私もニワトリが飛ぶのを見たと言った。「え、どこで見たの？」と聞くと広島の呉」だと言う。呉は賑やかな町です。私の信じられないという顔を見て「本当よ、呉港の傍の外人墓地で見たわ。」呉港は造船が盛んで戦艦大和もここで作られた。江田島の海軍士官学校も近くにある。外国船も着き、海軍の士官が亡くなると埋葬されるそうだ。

友人は庭の奥の１５メートルはある杉の木を指差して「あの位の高さから飛ぶのよ。」と言った。やはりこれは即興の作り話だと思った。彼女は昔から非常に話上手だった、それに論理的に話すので、私はいつもやりこめられていた。

「あなたはあの木のてっぺんに、ニワトリが飛び上がると言うの？」　友人は口びるの横にかすかに笑みを浮かべ、余裕たっぷりに「あのね、一気に飛び上がるのではないのよ。その木は枝がいい間隔に伸びているの、だから１枝ずつぴょん、ぴょんと上がって行くと木のてっぺんまで行けるのよ。」なるほどそれは論理的な説明だ。しかしその木のてっぺんから、あの鶏がどうやって飛び降りるというのだ。その問いにもゆったりと、ほほ笑みながら「ニワトリも鳥だから羽があるでしょ。羽をバタバタしていると、飛ぶというか落ちるというかいつの間にか、着地するのよ。」私はきっとその鶏は鳩くらいにほっそりしているのだろうと思った。ところが私がそのニワトリはスリムなのかと聞くと、太って丸々していると言う。

私はため息をついた。彼女は明らかに私の反応を楽しんで話しいるのが分かる。私は早く彼女の話のしっぽを捕まえようとあせった。　「どうして墓地の周りの草を食べているニワトリがそんなに丸々しているの？」　「お墓の甘いお供え物を食べているからよ。それに餌をやっている人もいるのよ、１羽じゃなくて６、７羽はいたわ。」　私はこの本当のような嘘のような話に、とうとう最後までつきあわざるをえなかった。

「分かったわ。でもそんな肥ったニワトリが、わざわざ苦労して１５メーターもある木のてっぺんまで上がって、バタバタと落ちるような飛び方をして降りてこなければならないの、決して楽しんでいるとは思えないわ！」「それはそのニワトリが雄だからよ。」　なるほど、その雄鶏は墓所にハーレムを作っていて、雌鶏達に自分がいかに勇気があるか見せているのだろう。「いいえ、そこにいるのはみんな雄鶏ばかりよ」と言った。私はこの話を真面目に聞いていた事が、ばからしくなった。やっぱりからかわれていたのだ。

そんな私の気持ちを読み取った友人はあわてて「本当の話よ。この話は市政便りにも掲載されていたんだから。ひよこを外人墓地に捨てないで下さい。ニワトリに餌をやらないで下さい。夏は朝４時頃から雄鶏の時を告げる声に近所の方は迷惑をしています。と書いてあったわ。あの雄鶏の鳴き声って、かん高っくて、澄んでいて遠くまで聞こえるでしょ。」「えー、　でも、ひよこを捨てるってどういう事？」

友人はちょっと声を落として顔を曇らせ、空飛ぶニワトリの真相を話してくれた。
「祭りなんかの夜店で、ひよこを安く売ってるのよ。親が子供にねだられ小さくて、可愛いくて、安いし、つい買い与えてしまうの。　可愛いかったヒヨコはすぐに大きく成っていき餌代はかかる、しかも売られているヒヨコはみんな雄なので卵は産まない、場所はないし困って仕方なく墓地に持って行って放すの。」

イギリス随想４題

今村朗

「桜と樫」

モスクワからロンドンに来る時にロシアの友人達を招いてお別れ会をした。若い人たちに混じって８４歳の知日家であるオフチンニコフ氏がいた。彼は１９６０年代にプラウダ紙東京支局長として日本に滞在し、その時の観察を基に「一枝の桜」という本を書いてソ連でベストセラーになった。共産主義イデオロギーを余り感じさせない、冷静な日本論として日本でも話題になった。彼は、その後、ロンドン支局長に転じ、「樫の根」というイギリス観察記を書いた。私はイギリスを象徴する木は樫であるということを初めて知った。

彼はお別れ会の挨拶で自身が日英の両国を観察・比較する機会を得たことを引き合いに出して、私がロシアとイギリスを比較することは大きな意義があると励ましてくれた。彼は私に「桜と樫」という本をくれた。それは最近再版された２つの著作の合本であった。

私はイギリスに行ったらまず樫の木を見たいと思った。ロンドンに着くと、自然史博物館で木の見分け方の本を買って、キューガーデンへ樫を見に行った。それは枝ぶりの見事な大木だった。それ以来、近所の公園を散歩する時には樫を探すようになった。地方に出張に行く途中の電車の窓から１本だけポツンと立っているのを見つけることもあった。恥ずかしながら樫が英文学でどう扱われているかも知らないままである。「樫と白樺」（白樺はロシアを象徴する木）等という本を書ける訳もないだろう。しかし、樫の木を見分けるのだけは自信がついた。

（この一文を書いているうちにロンドン市内のあちこちで桜が咲き始めた。イギリスにこんなにたくさん桜が咲くとは私には予想外のことで、とても嬉しくなった。この桜はどこから来たのか。今度は自然史博物館のホームページを訪れてみた。するとロンドンの桜の一部は日露戦争でイギリスが日本を支援してくれたことのお礼に日本から贈られたものだというイギリス人の証言を見つけた。私には初耳だったので、これからもう少し調べてみたいと思っている。）

「英語、アクセント、ビートルズ」

私は最初イギリスで話されている英語はてっきりイギリス英語という一種類の言語であり、イギリス英語とはクィーンズ・イングリッシュのことだと思っていた。ところがロンドンに来てからまだ日が浅い頃、ある会社に請求書の件で電話したら、相手の英語が全く聞き取れない。何度聞き返しても意味不明のままであった。私は自分のヒアリング力のなさに愕然とした。後でわかったことだが、どうも私が電話で耳にしたのは労働者階級のアクセントのようだった。日本の学校ではアメリカ英語を基本として、しかも標準語しか教えないので、イギリスの労働者階級のアクセントは全く馴染みのないものであった。そういえば中学時代によく聞いていたビートルズのジョン・レノンは「労働者階級の英雄」という曲を作っている。彼の父親は労働者階級だった。そこで彼の昔のインタビューを聞き返してみた。すると電話の主のアクセントとも少し違っていた。ジョンのアクセントはリバプール訛りであった。私が最初に出会ったイギリス英語とは、実はクィーンズ・イングリッシュではなく、リバプール・アクセントなのであった。

階級と出身地域でアクセントが違う。それだけではない。イギリスでは階級は固定的であると良く言われるが、実際にはそうでもないようだ。ビートルズは労働者階級の出身者

でもサーの称号や勲章をもらうことが出来ることを示し、当時の若者に希望を与えたという。そして同じ人が階級を上昇していくと言葉も変えていくのだという。ちなみに上流階級の言葉使いも単にクィーンズ・イングリッシュであるという以上に言いまわし等にも特色があるということを最近教わった。

私が一番好きなイギリスのアクセントはスコットランド・アクセントである。最近は独立も取りざたされているスコットランドだが、ウイスキーをたしなむだけで、残念ながらまだ行ったことはない。しかし、出身者に会うと皆ゆっくりと話してくれるので、他のアクセントより分かりやすい。しかも優しそうに話してくれるので、心が落ち着いてくる。イギリスの企業の多くはクレームを受け付ける自社のコール・センターをスコットランドに置いているという話を聞いたことがある。スコットランド・アクセントは怒ったお客をなだめてくれる作用があるのかもしれない。

「多様性とリベラリズム」

エコノミスト誌によればイギリスの地方毎のアクセントは近年、強まる傾向にあるという。欧州統合やグローバリゼーションの反作用として地域主義の強まりが指摘されるが、それと関係があるのだろうか。確かに英国でのグローバリゼーションの進展は目覚ましいものがあるように思う。ロンドンで二階建てバスに乗っていると英語を聞くことは稀である。最近、１０年振りに外国から帰国した英国の外交官に何が一番変わったかと聞いたところ、ロンドンの外国人が増えたことだと言う。なぜだろう。一つはＥＵの拡大だ。ある時、床屋に行ったら客も店員もロシア語でしゃべっているので、こちらもロシア語で話かけたところ、旧ソ連のリトアニアから来たということだった。ＥＵの東方拡大の影響をロンドンの散髪屋に見たといったら大げさだろうか。しかし、それだけでこれだけたくさんの外国人がいることを説明できない。実際、ＥＵ以外の国々から流入する移民の方が数の上では多い。イギリス、特にロンドンが外国人を惹きつける魅力は一体どこにあるのだろうか。

それが何かは上手く言えないのだが、まさに今のコスモポリタンな雰囲気、多様性そのものにある、と言えないだろうか。

では、元々ここにいたイギリス人の側はどう思っているのだろう。これだけ移民が多いと外国人排斥ということが起こりそうなものだが、彼らは思いのほか平気な顔している。もちろん、この国でも移民を減らすべきだという意見は強まっており、移民政策は人々の政治的な関心事項の一つになってきていることは確かだ。しかし、人種差別的、排外主義的な意見はまず聞かれない。

その理由の一つはイギリスの伝統であるリベラリズム（自由主義）があると思う。それに加え―あるいはそのような思想的な伝統を背景にしてと言うべきかもしれない―イギリス人はサッチャー時代以来、国を開放して外国資本を導入したことで国が活性化したということを学んだ。かつてイギリス経済は製造業の国際競争力が低下し、優秀な人材は金融やコンサルティングに移った。産業革命発祥の地マンチェスターを訪れたが、往年の鉱工業は痕跡すらも殆どなかった。日本でいえば空洞化だろう。しかし、そこで終わらなかったのがイギリスである。サッチャー時代に始まった積極的な外資導入や規制緩和で経済は復活した。日本企業の進出による貢献も極めて大きいものがあった。今や日本企業はイギリスで約１３万人を雇用している。欧州大陸に輸出される製品も多い。イギリスが日本にとり欧州の玄関口と言われようになった所以である。

日本でも空洞化の懸念が言われて久しいが、近年、日本はＥＵを含む各国と経済連携協定を締結することを通じて「国を開く」ことで活路を見出そうとしている。経済連携協定とは、お互いの制度を貿易・投資を推進するように更に自由化して双方の経済を成長させようとするものだ。国を開くということには、

外国人に日本へ来てもらいビジネスをしてもらうことも含まれる。近い将来、東京のバスの中で日本語が聞こえなくなる日が来るとは想像しがたい。しかし、各国との経済連携を進めていけば、今よりもずっと外国語を聞く機会が増えるに違いない。明治の近代化でイギリスが手本となったように、新たな開国でもイギリスが手本となる日が来たようだ。

「ビールと欧州懐疑主義」

国を開いたといっても、イギリスはユーロには参加しなかった。イギリスでは欧州統合が進んで国家主権が制限されることに反対する欧州懐疑主義の意見が当初から強かった。昨今のユーロ危機に対するイギリスの態度を見ていると、改めてイギリスとは欧州懐疑主義が強い国だと感じる。今回の危機を受けて、各国が資金を拠出しあって、財政危機に陥った国を支援するＥＦＳＦ（欧州金融安定化基金）というものが出来た。日本は欧州の国ではないにも拘わらず、これに約１２％拠出している。世界経済後退のリスクをはらむユーロ危機の行方は、日本にとり対岸の火事ではないからだ。しかし、イギリスは全く拠出していないと知ってびっくりした。ユーロ危機で欧州の隣人が苦しんでいるというのに。それだけではない。ユーロ危機から脱却するため各国間の財政統合を進めようとする協定案に昨年１２月イギリスはただ一国反対した。孤立も辞さない強い態度は、シティに対する規制を嫌う実利もあるだろうが、それだけだろうか。私は、直後の世論調査で国民がキャメロン首相のこの態度を強く支持したことに注目した。欧州懐疑主義は、与党保守党で特に強いが、むしろ政党の如何に関わらず、多かれ少なかれ国民一般に広く共有されているのである。ここでも規制を嫌うイギリス世論のリベラリズムの考えが強いことが背景にあるのではないかと思った。ここ１～２カ月の動きを見ていると、イギリスはＥＵ各国に規制緩和を進めて、域内の経済成長を高めようという提案を行っている。ユーロ危機脱却には経済成長が欠かせないからだ。今度は賛同する国も増えているようだ。リベラリズムを信条とするイギリスらしい提案だと思った。これは日本とＥＵの経済連携協定の考え方と軌を一にするものでもある。当然、イギリスはこの協定の交渉開始に賛成であり、このような提案をしているイギリスという国を日本は大切にすべきと改めて思った。

　ところでイギリスは、大陸諸国と異なり未だにメートル法を義務付けていない。これも欧州懐疑主義的な考えの影響だという。確かにパブのビールを注文するときは「a　pint,　please」と言う方が何かかっこいい。pint という単位（568 cc）はビールのために出来たのではないかと思ってしまう。これがリットルになってしまったら、パブ文化にもちょっとした影響があるだろう。欧州懐疑主義の強いイギリス世論は、そこまでお見通しなのかもしれない。

在留邦人

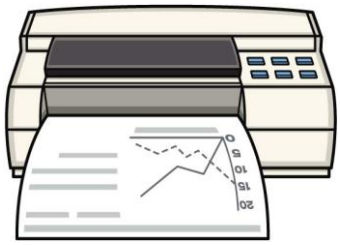
佐山菫子

最近、ある日本語の原稿を書かなくてはならない関係で、英国における日本人のデータが入用になり、大使館に電話を入れた。このインターネットの時代になぜ、先にウェブを見なかったのか理由は定かでないが、英国における日本人のことは大使館に聞くに限ると即座に思ったからだろう。インフォーメーションの人は親切に外務省からのデータがあるので、それを調べるようにと助言をくださった。ところがその短い会話の間にわたしは「日本人」のことを聞いているのに、その人は何度も何度も「在留邦人」と繰り返すのである。

ついに「邦人」ってなんですか、と聞いてしまった。「さあ....」という返事。こちんと来た。それで、電話を切るとネットから情報を得ると同時に「邦人」について調べてみた。

同じような疑問を持った人がいたようで、質問と解答がいくつかすでに出ていた。邦人とは日本人のことだが、報道関係者や政府関係者がよく使うので、一文字短いのが便利なのではないのか、という意見。さらに探すと、邦人とは「自国の人」の意。異邦人に対応している。なるほど、なるほどとわかってくる。中にはこの「自国の人」の意をとって、海外で自国の人よ、がんばってくださいという意味がこめられているのではないかという解答もあって、嬉しくなる。極めつけは日本人には血統と国籍という点から、結婚などで日本国籍を得た外人などを含んで、3 種類あり、邦人は国籍、血統ともに日本人で、かつ、海外に暮らしている人を指すという説。海外の事故などの被災者は邦人と呼ぶのに、なぜ、日本人がノーベル賞などをとったとき、たとえその人が海外に住んでいても、日本人と呼ぶのかという問いには、それは日本人を自慢したいからだ、との単刀直入な解答があった。そういうわけで、英国に暮らす、血統、国籍の両面から保証された日本人で、特に母国が自慢したいような理由を持たない人は、在留邦人と呼ばれることになる。そうして母国にいる日本人とは区別されて「在留邦人」正式には「海外在留邦人」として統計処理されていることになる。同じ日本人でありながら、国内におらず、海外に暮らしている人を、国内にいる日本人の立場から呼ぶときに使う言葉なのだという理解ができた。

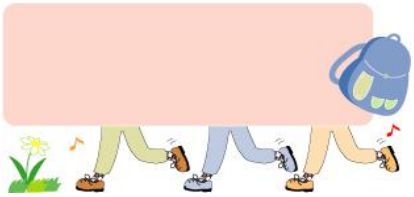
英国に暮らす日本人の数は、外務省が 2011 年 10 月に発表した海外在留邦人数の調査によると、2010 年 10 月 1 日現在、総数で約 6 万 2000 人とある。以下数字はすべておよその数であるが、イングランドに 6 万人、スコットランドとウェールズに 1,200 人、北アイルランドに 250 人、その他の諸島に 100 人足らず。このうち、永住者は男 4,000 人、女 11,000 人で、合計が 1 万 5000 人。グループ別に見ると、『民間企業関係者及びその家族』と『留学生・研究者・教師およびその家族』がそれぞれ 2 万人ほどで、グループとしては一番数が多い。わたしは『自由業関係者及びその家族』に属するのだろうから、約 2000 人足らずの一人である。ロンドンの日本人人口は UK でも一番多く、3 万 5,000 人を越えているから、英国在留の日本人の大半がロンドンに居住していることになる。海外在留邦人の世界的傾向を見ると、米国が一位で約 39 万人、次ぎに中華人民共和国、オーストラリアと続き、英国は第 4 位である。5 位はブラジルで、最近英国が追い越したらしく、ブラジルの日本人の増加を期待する記事が出ていた。日本の 2011 年の総人口が 1 億 2763 万人とあるから、海外在留邦人、ましてや英国のそれは微々たるものである。その少数者である英国暮らしの日本人になにか共通した特徴があるのかということになると、これは定かでない。よく聞くのはこちらにいると「まわりが放っておいてくれるからよい」と言う声であるが、果たして自分でも実行に移せているかというと、そうでもなく、日本人が寄り合うと待ってましたとばかりに世話をやきあうことになる。もちつもたれつという微妙なバランスはどこにいても必要なのだろうが、もつ人ともたれる人の役割が分離して、互いにストレスがかかることになり、実行はなかなか容易ではないようである。



大人のロンドン散歩

加藤節雄

今年のロンドンはオリンピックと女王のダイヤモンド・ジュービリーが重なり、世界の目が集まることになるだろう。それに伴い、日本の書店には５月ごろからロンドン・コーナーが設けられ、様々なイギリス関係の本が並ぶことになるそうだ。ところが、「なるそうだ」と、他人ごとの様に言っていられる状況ではない。というのも、その５月を目指してロンドンの本を書いて欲しいと言う注文があり、過去半年間その執筆に多くの時間を費やしたからだ。



英国日本人会の中にも「ウォークの会」と言うのがあるが、日本でも今散歩が流行っている。その散歩も若者の散歩ではなく、大人の散歩だそうだ。河出書房が「大人の東京散歩」と言うタイトルで東京案内を出版したところ売れ行きが良く、各種「大人の散歩」本が刊行されている。そこで、そういった「散歩本」を海外にも広げることになり、先ず今年話題になりそうなロンドンから始めようと言うことで、私に白羽の矢が当たった様だ。

大人の散歩と言うのは若者の散歩とはどう違うのだろうか。出版社との間でいろいろな事が確認された。先ず第１に観光ガイドにはしないと言うことだった。ロンドンの観光ガイドはありとあらゆるものがすでに出版されている。ところがそのほとんどがピカデリー・サーカス、バッキンガム宮殿、大英博物館といった有名な場所のガイドと、ブランド・ショップや高級レストランの紹介を中心にしている。どの本もキメの細かい記述がいっぱいで、その本を一冊持って行けばロンドン観光はバッチリといった内容である。

しかし、こういったガイドブックはそれ以上のものではない様な気もする。初めて海外に出る旅行者にとっては便利で貴重な本かもしれないが、リピーターと言われる旅行者や旅慣れている大人にとっては物足りないだろう。大人の旅はその国の歴史を知り、現在の社会状況を理解し、その国の人がどんなライフスタイルで生活しているのかを知得する旅である。他人にお土産を買う旅ではなく、その国の人と楽しみを共有し、自分を豊かにする旅ではないだろうか。そして日本人旅行者もすでにそこまで成長して大人になっているはずである。

その国のライフスタイルを知るのはやさしいことではない。その国に長く住んでいる人の知識が役に立つことは明らかである。特にロンドンの様なあらゆる人種が入り混ざって住んでいる大都会のライフスタイルともなると、住んでみないと分からないことも多い。その意味でも観光名所だけを紹介するのではなく、ロンドン各地の特性を紹介し、ロンドンの全体像を浮かび上がらせるという難しい作業となった。ロンドン各地を散歩しながら真のロンドンのことを知ろうと言うのがアイデアだ。

私もロンドンに住みだしてから 40 年を超えている。ロンドンの隅々まで分かっていると言いたいところだが、実はこの本を書くに当たって、ロンドンは広く、様々な顔があることに改めて驚かされた。私の住んでいる北ロンドンや友人の多い西ロンドンに関してはある程度の知識や土地勘はあるが、南部とか東部に関してはあまり行ったこともないし、あえて言えば外国の様な印象を持っているのが実情だ。そのため、南の知り合いを訪ねたり、東へ足繁く通ったり取材に相当時間がかかった。

そして感じたのは、ロンドンの持つダイバーシティー（多様性）である。金融街のシティーやウエストミンスター寺院もロンドンなら、サウスオールのインド人街やハリンゲーのトルコ人街もロンドンだし、ニュー・モールデンのリトルコリア、ブリック・レーンのバングラデッシュ・タウンもロンドンである。「これがロンドンだ」と言う場所は無い。いろいろな顔を持ったコミュニティーがあり、それが集まって構成されているのがロンドンであると言えるだろう。

出版社からの要求はロンドン全体をカバーして、住んでいる人しか分からないような目線で書いて欲しいというものだった。そこで市内中心部だけでなく、ロンドンの東西南北を含めて 50 か所の散歩を紹介することにした。そのため、マズウエル・ヒルやテディントン、ダリッチ、ペッカムといった観光客はおろかロンドンに住んでいる人でも必要ない限りあまり訪れないところも入れている。ガイドではないのでタバコ屋の角を右に曲がり、映画館の前を通り過ぎてと言う様な説明はない。その地域の特性をピックアップして自分の経験も含めてエッセー風にまとめてみた。日本からの大人の旅行者に散歩しながらロンドンの真の姿を知ってもらえれば幸いである。

会員となって思うこと

ヴァンダースケイフ
日出美

４月から日本人会の会員として二年目が始まる。入会以来皆様方のお仲間に加わり会の活動や行事に積極的に参加しながら先輩会員の皆様方との親睦を深めて頂いている。

私がこの会を始めて知ったのは、九州に里帰り中の友人が送って呉れた新聞記事であった。それは２００８年８月２２日の宮崎日日新聞掲載の “「日本遠望」永住の果て（英国）”と題する半ページに及ぶ紹介記事であった。英国に暮らして長い私は、日本人会以外にも永住者を対象とした親睦会の名前をいくつか知っていたが入会する程の強い関心は持たず、気心の知れた友達のサークルの中でそれなりの楽しみを見つけていた。しかしこの会の存在と活動を知ってから次第に関心が沸いて行った。

入会後は「歩く会」「紅葉会レクチャー」「日本人墓地の清掃」等に参加しているが、これからは別な分野にも参加して、会員の皆様方との更なる交流や親睦を深めて行かれたらと願っている。「福祉」の問題も大切だと思う。「手芸」関係は残念ながら手先の不器用な私には無理のようだ。その他「座禅の会」、「スケッチの会」、新たに「カラオケ教室」や「水泳教室」も加わり益々会の活動範囲が広がっていく事は望ましい。私の親友達も数人が私の後に続いて当会員となり、各々が会の活動や行事を有意義に且つ楽しんでいる様子を嬉しく思う。

長年の英国社会での暮らしの中で日常さほど不便さは感じなくても、私達の殆どは日本で生まれ育ち教育を受けた日本人である。若い頃は気にも掛けなかった老後という課題も共に真剣に考えるようになって来た。望郷の念に駆られ、日本食や日本人社会が恋しくなるのは皆同じであると思う。日本人会は同胞同士の連体感があり、互助の精神に富み、親睦と友好を強め、社会奉仕や慈善に熱心であるという点が私の関心と合致している。この会の名前を新聞紙上で始めて知った日から三年半以上が経過した。今は私の肌に合った会に入会して良かったと感じている。英国日本人会の更なる発展を希望したい。

英国春秋俳壇

バロウ典子

ふるさと

ふるさとの　梅ほころぶと　母の文

降る雪の　地に咲く花や　スノードロップス

凍て蝶の　ふれれば生命　はばたきぬ

背にあたる　陽のあたたかや　クロッカス

春の雪　木々一斉に　目覚めけり

はすの花　花弁を落とし　揺れにけり

（キューガーデンにて）

ゆっくりと　雉子の歩みや　雪解みち

雁ゆきぬ　春の間近かを　告ぐるかに

春来ぬと　目にも　耳にも　香りにも

大なゐを　くぐりて　芽吹き　みちのくに

英国春秋俳壇

子　猫

エリオット　つや子

目のやさし春日匂いの子猫抱く

日が少し伸びて来たねと猫に言う

青空に木の芽ぽっこり風ゆれて

今年又咲き揃いしや蘭の花

秋しぐれ豆柔らかに煮えにけり

ポインセチア亡き人しのぶ空彼方

クリスマスキャロル歌って過ごす日々

着ぶくれて身動きにぶし年の暮れ

紫のサフランうずめ雪降りつむ

カリカリと雪踏む丘に雀鳴き

ユーロ危機・ギリシャ危機の行方

春井久志

2008 年の「リーマン・ショック」を発端とする世界金融・経済危機の結果、世界の先進国経済はその発展の時計を 10 年ほど遡ることになった。英国の経済専門誌『ザ・エコノミスト』は、今次の危機によって打撃を受けた諸国の「失われた時間」を計算し、それを「プルースト指数」[1]と命名した。その計算によると、ギリシャ経済の時計は最も大きな後退をよぎなくされ、それは 12 年を超える後退であった。ギリシャ以外のユーロ圏では、アイルランド、イタリア、ポルトガルおよびスペインは７年あるいはそれ以上の成長の時間を失った。流動性不足に陥った銀行を救済する羽目に陥った最初のヨーロッパの国である英国は、８年を失った。この世界的危機の初発国となった米国は 10 年を失った計算になる。

この指数は、家計の富（金融資産の価格、不動産の価格）や国内総生産と民間消費、株式市場および実質賃金と失業など７つの経済指標のそれぞれの失われた時間の単純平均として計算されている。

この世界的危機を第２の「1930 年代の世界大不況」とさせないようにと、先進国首脳によるサミットやＧ７の財務大臣・中央銀行総裁会議だけでなく、新興経済圏諸国を巻き込んだＧ20 による景気対策が国際政策協調として採用された。その結果、世界経済は急速な回復過程に入ることができた。しかしながら、各国の政府による民間銀行への資本注入や景気対策は、その結果、多大な政府債務を累増させた。そのため、次には、膨大な政府債務を抱えた政府自体の債務返済の可能性に対する不安、いわゆる「ソブリン・リスク」が懸念され、国債の発行金利が急騰する事態が発生した。さらに、その政府債務である国債を大量に購入した民間銀行は、国債価格の暴落による巨額の不良債権を抱え込み、経営破綻が懸念されるとういう悪循環が生じている。

ユーロ危機の震源地であるギリシャは 2012 年３月 20 日に大量の償還を予定していた。ギリシャ国債の償還額は 145 億ユーロ（約１兆 5800 億円）であったが、財政難からギリシャ政府が一方的に借金棒引きを宣言すれば、金融市場が混乱に陥る恐れがあった。いろいろと曲折はあったものの、最終的には民間投資家（民間の銀行やヘッジファンドなど）がギリシャの債務削減を受け入れ、またギリシャ政府の緊縮財政や構造改革策の受け入れを条件に欧州連合（EU）や IMF などが追加支援を決定したことにより、秩序なきデフォルト（債務不履行）という最悪の事態は漸く回避された。

この背景には、2011 年 12 月と 2012 年２月の２回におよぶ欧州中央銀行（ECB）による１兆ユーロを超える長期資金（約 110 兆円）の低利融資が民間銀行の流動性不足を解消したことが大きく影響している。ECB の狙いは、市場での資金調達し、その資金を国債で運用していた民間銀行の信用がギリシャ危機で大きく動揺し、市場での資金調達が困難になっていた事態を解決することであった[2]。他方、マクロ経済面では ECB による巨額の資金供給によって銀行の市場での資金調達が減少し、市場金利が低下する余地が大きくなる。これが中期的には、ユーロの為替レートの下落圧力となり、ユーロ圏諸国の輸出を促進し、一定の景気浮揚効果が期待されている。

---

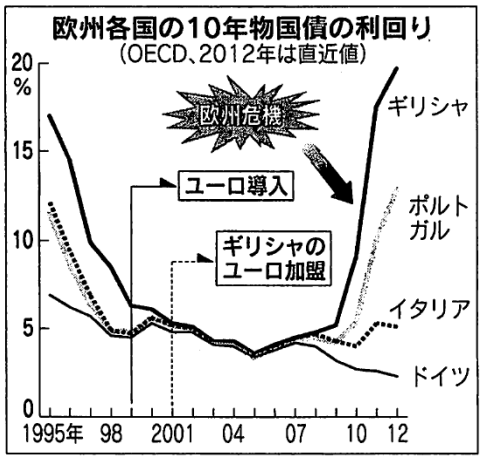
[1] フランスの小説家、Marcel Proust (1871-1922 年)の小説『失われた時を求めて』(*A la recherché du temps perdu*, 1913-27 年)から命名か。

[2] 国家は銀行に資金調達で依存し、銀行は国家にベイルアウト（資本注入）で依存する「危険な関係」に陥っている。しかし ECB は国家に対して最後の貸し手としての保険機能を約束していない。それがユーロシステム全体を脆弱にしている。この最後の貸し手機能を迂回して果たすために、ECB は国家に対してではなく、民間銀行に資金を供給して国債を間接的に供給する「裏口の量的緩和策」を実施したとみなすことができる。

しかしながら欧州の銀行危機はかなり根深い。昨年末の ECB による資金の供給先は 523 行であったが、今回の供給先は 800 行にのぼる。供給先の拡大は、信用不安を抱える銀行の多さを象徴しているとも言えるからである。ECB の措置により銀行の資金調達面での不安は薄れるものの、低金利が長引けば、銀行は投融資によって利鞘を稼ぐことが難しくなる。その結果、欧州では銀行の収益性が低下し、銀行界の再編・統合が加速する可能性が高くなる。この 800 行の中には自己資本が薄い銀行が多く含まれている。主要な銀行の資本不足額だけでも、その合計額は 1,000 億ユーロを超えているとの試算もある。そうだとすれば、ECB から低利の資金を供給されても、銀行の自己資本比率の低下に繋がる企業向け融資や住宅ローンなどにはあまり向かわないことが懸念される。そのため、資金調達の不安が薄れた銀行は、リスク・フリーとみなされている国債を保有し続け易くなる。イタリアやスペインの国債利回りが急低下している。その意味では、政府債務危機が和らいだ形にはなっているが、そのような諸国が緊縮政策の手を緩めることになれば、中長期的な均衡回復に必要な構造改革そのものが遅れる恐れが出てくる。

さらに ECB による大量の資金供給がユーロ圏の構造問題を広げる恐れもある。資金に余裕が出た銀行でも、上述の理由から、自国の企業や家計への融資を増やすとは限らない。その結果、ギリシャなどの周辺国では景気がいっそう後退する一方、ドイツなど北欧諸国経済が危機にもかかわらず、再加速するとの見通しもある。この見通しが正しいとすれば、銀行融資は北欧諸国に集中し、今次のユーロ危機の背景にある域内不均衡である「南北格差」を広げる方向に作用しがちになる。ECB が供給した巨額の資金がドイツなどで局所的なバブルを引き起こす可能性も否定できない。留意しなければならない重要な点は、今回のギリシャの救済や ECB による流動性供給は「時間を買う」ことに過ぎず、その買った時間を有効利用して、その間に域内不均衡の根源である経済の効率化や競争力の向上を図る成長戦略の採用が最も肝要である。

ギリシャ危機は峠を越えたかのようにも見えるが、ギリシャ国債の利回りを見ればあまり楽観的な評価はできない。たとえばギリシャの 10 年物国債の利回りは直近でも約 20%であり、5%前後であった以前の水準に戻る気配は今のところない。「第２のギリシャ」と見られているポルトガルの国債利回りも約 13%である。これは、累積している国債残高がきちんと返済されるかどうかを市場は未だに危ぶんでいる証拠である。図から明らかなように、1995 年のギリシャ国債の利回りは約 17%であり、深刻な債務危機に見舞われている現在とあまり変わらない。少し長い時間軸で見れば南欧諸国の国債利回りは緩いU字型カーブを描いている。統一通貨ユーロが成立したのが 1999 年でギリシャは 2001 年からユーロを採用した。ユーロシステムへの参加により経済の一体化へ向かうとの期待感からギリシャ国際の信用力は高く評価された。ユーロ危機発生までの約 10 年間、ギリシャ国債の利回りは急激に低下し、ほぼ３～５％であったドイツ国債の利回りに収斂していった。しかし危機発生後、ギリシャなどの「ユーロ離脱」を織り込んだ金融市場はギリシャ国債の利回りを急騰させた。ギリシャ国債がドイツ国債と同様に「リスク・フリー」の資産ではないことが判明し、1990 年代の日本の不動産関連融資や2000年代後半の米国のサブプライム関連の証券化商品と同様、「不良債権」であることに市場が気付いたに過ぎない。「財政統合なき通貨統合」の脆弱性が顕在化し、ユーロに対する市場の期待が根拠の薄いものであったことが判明した。

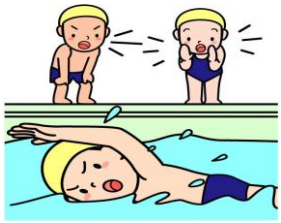


出所：『日本経済新聞』、2012 年 3 月 25 日付

このようなユーロ危機を根本的に解決するには、危機対策としての資本注入資金である欧州金融安定基金（EFSF）や欧州安定化機構（ESM）などの「防火隔壁」を高く積むしか

ない。現在検討されている「ユーロ共同債」を正当化する最大の理由は、ユーロ圏の安全資産を銀行システムに供給することである。EU は漸くにして財政統合へのプロセスに歩み出し、ユーロをめぐる緊張は和らいできている。英国は賛成しなかったが、EU は財政規律を強化する新条約で合意した。しかしドイツは他国の借金の肩代わりのリスクがあるユーロ共同債の創設には国民感情のゆえに応じることができない。欧州の統合という大義と国民感情を考慮せざるを得ないポピュリズムとの「二律相反」の故に、解決の道は未だに見出されていない。

ドイツのメルケル首相は、女学生時代の水泳の時間に飛び込み板の上で恐怖心から固まってしまった。授業終了のベルが鳴ったと同時に、彼女はプールに飛び込む勇気を搾り出すことができた。メルケル首相の伝記作家によると、「私は生来、勇気がないのよ」と後年漏らした。この作家によれば、メルケル首相は自分の限界まで突き詰め、その後にやっとその限界を乗り越える。「彼女は自らの能力に対して根本的にきわめて強い自信を持っている」、とのことである。欧州統合の大義に燃える「新しい鉄の女」であるメルケル首相の政治的リーダーシップによってユーロ共同債の創設が期待されるところ大である。

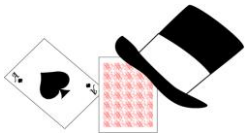


ギリシャはなお懸念を抱えている。ドイツなど北欧諸国には、ギリシャのユーロ離脱を望む声もある。しかしギリシャ離脱はユーロ危機を再燃させる恐れが大きい。法的には、EU 離脱の規定はあっても、ユーロ離脱の規定はない。重要なのは EU 全体の成長戦略である。

Ｇ７やＧ20 のような場での経済政策の国際協調と同列に論じることはできないかもしれないが、EU27 ヵ国あるいはユーロ 17 カ国においても、国際的な政策協調によって地域内の経済厚生を高める可能性は大きい。ただし、政策協調に参加する各国には、絶えず、協調行動から離脱したり、相手に負担を押し付けたりすることにより、相手国の犠牲において自らの経済厚生の改善を図ろうとするインセンティブが常に存在していることには留意する必要がある。政策協調を実現するためには、各国の行動を拘束できる公平で強力な超国家的機関がリーダーシップを発揮するか、現実にそのような超国家的機関が存在しない場合には、スーパーパワー（超大国）が強いリーダーシップを発揮することが前提になる。しかしながら、超大国の行動や判断は自国の利害に大きく左右される。石油ショック後のＧ７で主張された「機関車論」や 1985 年の「プラザ合意」における米国がそうであった。また、2010-12 年現在における欧州の危機からの脱却のカギを握る EU 域内の超大国、ドイツもその例外ではない。民主主義国家の政治的指導者は各国の民主的な選挙によって選ばれた政治家たちである以上、自国中心主義的な各国世論からかけ離れた決断を下すことは、当然のことながら、決して容易なことではない。また、正確な経済構造に関する知識を各国の政策当局が共有していない状況では、超大国は自国に都合の良い経済モデルを前提として、国際協調や「欧州の統合」の美名の下に他国に対して利己的な内政干渉を引き起こしがちになる。

イタリアでは経済学者のモンティ首相が労働市場改革などの成長戦略を打ち出している。国家レベルの成長戦略に加えて、競争政策はプロジェクト融資など EU レベルの成長戦略の強化することが強く望まれる。経済危機が生じて政治家が混乱を解決できない状況では、政治家は経済学者などに経済政策の運営を任せることが必要とされているように考えられるのが、昨今の状況ではなかろうか。

英国春秋ディケンズ特集



ディケンズとロンドン

松本　靖彦

2012 年 2 月 7 日。検索サイト Google のトップ・ページを開いてみて、「おや？」と思われた方はいらっしゃいませんでしたか。その日は『二都物語』や『大いなる遺産』で知られる作家チャールズ・ディケンズ 200 回目の誕生日。Google も右のようなディケンズ作品の登場人物を配した絵文字で祝ってくれていたのです。中央のOのところには『クリスマス・キャロル』のスクルージと杖をもったティム坊やがいますね。Google も粋なことをするものです。

2012 年のロンドンは夏のオリンピックに向けて意気が揚がっていることと思います。一方、ディケンズ生誕 200 年も静かな盛り上がりを見せています。BBC ＴＶでは 2011 年末に『大いなる遺産』の、そして 1 月には『エドウィン・ドルードの謎』（執筆中にディケンズが急死したため未完の遺作です）の新作ＴＶドラマ化作品が放映された由。BBC Radio の方でもディケンズ作品のドラマやドキュメンタリーが新旧の作品合わせて立て続けに放送されました。新しい伝記も複数出版されています。

また、イギリス各地でディケンズ生誕記念の催し物があり、ロンドン博物館でもディケンズに関する特別展が開催中だと聞きました。調べてみると 6 月 10 日（ディケンズの命日の翌日）までだというではありませんか。どうやら 2012 年「ディケンズ生誕 200 年記念祭」の盛り上がりのピークは、彼の誕生日から命日あたりまでのようです。夏以降のロンドンはオリンピック開催でてんやわんやになるでしょうから、当然でしょう。この特別な年にディケンズが闊歩したロンドンの空気を吸いたい、今行かなかったら次の生誕記念は 2112 年になってしまう。それもどうせ行くならオリンピック前に行かないと……そう思うといてもたってもいられなくなった私は、2 月末にロンドンへと向かったのでした。

真っ先に向かったのはロンドン博物館の「ディケンズとロンドン」展です。「ロンドン」「大衆娯楽」「家庭の団欒」「ディケンズと近代」「生と死」という切り口から、彼がどのような人物でどのような時代を生き抜いたかを教えてくれます。自筆原稿を含めたディケンズゆかりの展示物は彼のファンにはどれも貴重なものばかりですが、本展はまた彼が生きた時代から現代に至るまでの 200 年のロンドンの変貌の様を見せてくれます。1868 年、完成して間もない頃の Paddington や Gloucester Road の駅舎の写真は、ディケンズにそれほど思い入れのない人にも興味深いのではないでしょうか。ロンドンの街並みにはヴィクトリア朝人たちの足跡が静かに息づいているのだなあ、と思わされました。なるほど、本展は「ディケンズとロンドン」両方の 200 年間を回顧しているのであり、その意味でロンドン博物館ならではのものだといえるでしょう。

膨大なディケンズ作品の本質を一言で的確に言い表せる自信は正直ございません。でも、彼が執筆を通して同胞に伝えようとしたのは「想像力を大切にして、みんな仲良く暮らそうではないか」というメッセージだった、と言ってもそれほど的外れではないと思います。痛烈な社会批判で知られるディケンズですが、彼は「悲惨な境遇にいる人たちの立場に立ってみるがいい」と、個々人の想像力に訴えかけることによって世の中をより良いものに

しようと努めました。想像力があれば、一見無味乾燥な日常の片隅にもロマンスが芽吹きます。また、想像力を用いれば「今の自分はこんな惨めな有り様だけど、別な人生のシナリオ、全く違う自分の可能性だってあるのだ」と人生を刷新することもできます。時代を越えてこのようなメッセージを人類に投げかけているディケンズ自身の想像力を何より刺激したのが、都市ロンドンでした。

ロンドンはディケンズにとってインスピレーションの源でした。ロンドンを離れて執筆していたある時彼は、「あの幻灯（ロンドンのこと）なしに書くのはとてつもなく辛い！」とこぼし、ロンドンの雑踏を恋しがっています。ロンドンの光と闇（それは人生の光と闇に直結しています）に魅惑され続けた彼は、それを比類のないほど活き活きと（時には生々しく）描き出しました。

ロンドンの津々浦々を知っていたというディケンズ。当然、主要作品には概ねロンドンが出てきますから、作品に関係した場所は至る所にあります。「ディケンズのロンドン街歩きガイド」という類の本も何冊も出版されています（一番のお勧めは Richard Jones と言う人の *Walking Dickensian London* という本です）。彼の住居跡もいくつか残っていますが、ここでは目印がプラークだけではない場所を二か所ご紹介いたします。一つ目は、彼が 1839 年から 1851 年まで住んでいた「Devonshire Terrace 1 番地」跡です。Marylebone Road と Marylebone High Street が交わる角の Marylebone Road 側に大人の背丈以上の大きさのレリーフがあります。あの『クリスマス・キャロル』や自伝的作品とされる『デイヴィッド・コパフィールド』が書かれたのはここだったかと思うと、愛読者としてはしばし立ち止まらずにはいられない場所です。実はこの 2 月にも寄って来ました。Marylebone High Street には素敵なカフェや書店もあるので、ディケンズ作品を手にしてゆっくりその感銘の余韻に浸ることもできます。

二つ目は Doughty Street 48 番地です。1837 年の 3 月から 1839 年の 12 月までディケンズが住んだ住居で、現在はディケンズ博物館になっています。『ピクウィック・クラブ』や『オリヴァー・トゥイスト』が書かれた場所であるということ以上に、ディケンズが愛した義妹メアリ・ホガースが亡くなった家であるために重要な意味がある場所です。新婚のディケンズ夫妻は妻キャサリンの妹メアリと三人でこの家に暮らしていたのですが、5 月 7 日深夜、突然倒れたメアリはディケンズの腕の中で息絶えます（心臓疾患が理由だったと考えられています）。それから数年を経ても「僕はメアリの隣に葬られたい」と友人に漏らした彼の嘆きぶりには、妻ある身にしては常軌を逸した感があります。17 歳という若さでのメアリの急逝は作家としてのディケンズにも強烈な影響をもたらしました。それ以降、彼は 17 歳くらいの美しいヒロインを描き続けたのです。彼にとってメアリは一体何を体現していた存在だったのか……そんなことを考えながら「メアリの部屋」で佇んでみるためだけにも、訪れてみる価値がある場所だと思います。展示されている調度品や地下のキッチンの様子は、ディケンズに特別関心のない方でも、ヴィクトリア朝初期（日本では江戸時代ですものね）の中産階級の人たちの暮らしぶりがうかがえて興味深いのではないでしょうか。（ただし、今年は改装のため 4 月 11 日以降 12 月まで休館です。残念ながら。）

ディケンズが 200 歳を迎えた今年、一人でも多くの方がディケンズとロンドンの魅力を発見（あるいは再発見）されることを願ってやみません。

ディケンズ少年と『タイム・トラベル』

坂次　健司

ディケンズ生誕 200 年

皆さんは初めてロンドンに足を踏み入れたときのこと、覚えていらっしゃいますか？そのとき感動されましたか？　ロンドンはどんな街だったでしょうか？

「遠くからロンドンを見たとき、なんて凄いところだろうと思って、そこでは僕の大好きな物語のヒーロー達が次々と冒険を繰り広げているような気がした。」

『デイヴィド・コパフィールド』

「僕の住んでいた町からロンドンまでは、五時間くらいの道のりだった。正午を少しまわった頃、僕を乗せた四頭立ての駅馬車は、往来する人や車がもつれ合って団子になり、そのまん真ん中へと分け入った。」　*『大いなる遺産』*

今年はディケンズ生誕 200 年です。父の転勤に伴い、『大いなる遺産』の主人公の少年ピップと同様、ケント州北部の海辺の町から馬車でロンドンに到着したのは、ディケンズが 10 歳、1822 年のことです。今回は時計の針を 190 年前に戻し、少年ディケンズの乗った駅馬車に同乗して、当時の街並みをタイム・トラベルしようと思います。

旧ロンドン橋

テムズ河南岸は沢山の馬車宿が軒を並べ、中世『カンタベリー物語』以来の異国へのアクセス地点でした。その酷い騒音と汚臭は否応なく馬車の中に飛び込んできたに違いありません。

少年ディケンズが馬車で渡った橋はローマ人が西暦 46 年頃に架けた橋と同じ場所、1209 年から石橋となった旧ロンドン橋です（現在の橋は 1831 年に 30m ほど上流に架け替えられました）。

図の中央が旧ロンドン橋で、19 の小さなアーチから構成され、大きな船が通り抜けられません。橋の下流の Pool of London には世界中の大きな船が停泊し、河岸に倉庫、クレーン、桟橋、ドックがひしめき合い、無数の帆柱や煙突がロンドンの富と力の源泉を表しています。

橋の北側にはシティの教会の無数の尖塔が黒い空に突き刺さっています。旧ロンドン橋北口から聖マグナス教会、大火記念塔が一直線に並んでいて、見るものを圧倒します。

ロンバード通り

橋を北上し、聖ベネット教会の角を左折すると、ロンバード通りです。1290 年にエドワード I 世がユダヤ商人を追い出した後、北イタリア・ロンバルディア地方の金融商人をここに住まわせて以来、現代でも金融街の中心区域です。ロンバード通りの 2 番地にご注目下さい。ディケンズが 8 年後の 18 歳のとき、そこに住む Maria Beadnell と恋に落ちます。しかし彼女は隣接する Smith, Payne & Smiths 銀行の経営者のご令嬢様。身分の違いを理由に二人の結婚は拒絶されます。後の彼の作品に登場する『デイヴィド・コパフィールド』のドーラ、『リトル・ドリット』のフローラは彼女がモデルとされています。

近くには老舗の２つのチョップハウスがあります。George & Vulture は『ピクウィック・ペイパーズ』の主人公がロンドンの拠点にした宿ですし、Simpson’s Tavern はディケンズが後年、よく通った店です。

さらにこの北側にはビクトリアン・ゴシック建築で有名な聖マイケル教会があります（セントパンクラス駅のミッドランドグランドホテル同様、ギルバート・スコットのデザ

インです)。この対面の Newman’s Court に『クリスマス・キャロル』のスクルージの事務所があったという想定です。

チープサイド

ロンバード通りを抜け、右にイングランド銀行、左にシティ市長公邸を見ながら、ローマ時代からの幹線道路チープサイドに入ります。美麗な尖塔をもつ聖メアリ・ル・ボウ教会は、この鐘を聞いて育った者だけが下町っ子（＝コックニー）と呼ばれる市民に愛着のある教会です。この教会の 12 の鐘には讃美歌が刻み込まれており、其々の頭文字を繋ぎ合せると、偉大な慈善家であり、4 度もシティ市長を務めた D. Whittington になります。

また、チープサイドの脇道は、Milk 通り、Bread 通り、Wood 通り、Friday 通り（＝魚市場)、Honey 小路、Change 小路（＝両替市場)、Ironmonger 小路、Poultry（鶏肉)、という名前が付され、その由来が簡単に想像できます。そうそう、『大いなる遺産』のピップ少年はチープサイドでジャガース弁護士と出会います。そもそもピップ少年が初めて乗合馬車でロンドンに到着したのは Wood 通りの Cross Keys 亭前です。Cross Keys 亭の名前は、1666 年のロンドン大火で焼失した聖ペテロ教会の跡地に建ったことに由来があり、今も写真の様な鍵印が残っています。

近くの聖ポール寺院の北側には中世のブックセンター、Paternoster 広場がありましたが、ロンドン大火後、本屋や印刷屋はフリート街に移転しました。その後、1868 年に Smithfield 市場が完成するまで、Newgate Meat Market として賑わい、毎朝、沢山の家畜がここで解体されています。さてさて、先を急ぎましょう。

フリート街

聖ポール寺院を背にして西進し、フリート街に入ります。ロンドン大火の後、クリストファー･レンによって修復された屈指の美しい尖塔をもつ聖ブライド教会はウェディングケーキのモデルになったことでも有名ですが､その向かいにはディケンズのお気に入りパブ、Ye Olde Cheshire Cheese があります。『二都物語』の弁護士カートンが革命家ダーニーを元気づけた飲み屋ですね。初めて辞書を編纂したジョンソン博士やシャーロック・ホームズのコナン・ドイル氏も常連客です。

その西側には、聖ダンスタン西教会が見えてきます。『デイヴィド・コパフィールド』には、この教会の仕掛け時計（巨人）が 12 時を打つのを待ち望む描写があります。実はこの時計､1671 年にロンドンで最初に分針をもった由緒ある時計です。2 人の巨人はゴグとマゴクという、シティの伝説上の護衛さんです。

教会の西の小道に Clifford Inn への入口があります。周囲には英国の四大法学院を始め、沢山の弁護士事務所があります。Clifford Inn は 1344 年設立の最古参ですが 20 世紀初めに解散。『リトル・ドリット』のティップがここの事務員として登場しますが、ディケンズが最初に勤めたのも Ellis and Blackmore という Gray’s Inn にある法律事務所です。

シティ・ドラゴン像が建っている場所には、テンプル・バーがあります。後に激化する交通事情から 1878 年に撤去されますが、2004 年に聖ポール寺院の北側に復元されます。『二都物語』に登場するテルソン銀行は、このテンプル･バーの影で窓が暗いと描写されています。実際、このモデルとなった Child 銀行（ゴールドマリーが店看板）は英国屈指の最古の銀行ですが、20 世紀に RBS 銀行に買収されてしまいます。

ストランド

ディケンズの両親が 1809 年に結婚式を挙げた聖メアリ・ル・ストランド教会を通り抜

けると右側にWellington通りが見えてきます。その通りを30mほど奥に入りますと「ディケンズ・コーヒーハウス」があります。1859～70 年にかけて彼が雑誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』を編纂し、また、住んだ場所でもあります。

政治の中心地ウェストミンスターと経済の中心地シティを結ぶストランドは、中世から上流貴族の邸宅街です。このストランドで一際目立つセレブ相手の銀行、Coutts 銀行が59番地にあります（現在は440番地に移転）。まさか、貧しいディケンズ少年がこの英国王家御用達の銀行に口座を持つようになるとは、誰も想像できなかったことでしょう。

後年、ディケンズがこの銀行の顧客となり、福祉活動を積極化できたのは、ある大富豪との交友関係が鍵になります。その大富豪とは、Coutts銀行創始者の直系で、英国一裕福な女性と呼ばれた Angela Burdett-Coutts です。彼女は1837年に遺産3百万ポンド（現在に換算すると1ポンド＝約7万円だそうで2千億円以上と推定）を引き受けますが、その後、同額以上の慈善活動を行ったといわれます。貧困者支援のための学校、住宅、食堂、職業訓練所、教会への寄付は勿論のこと、私が個人的によく通うお花のコロンビア・マーケットの創設、聖ポール寺院の鐘の寄付、ナイチンゲール看護婦の支援活動もしていました。後にビクトリア女王から叙勲も受けます。ディケンズが20代半ばに、この2つ年下の美人大富豪と出会い、彼女の福祉活動の助言役になります。男冥利に尽きます。

終着駅：チャリングクロス

さて馬車の終着駅はチャリングクロスのGolden Cross亭です。ここは『デイヴィド・コパフィールド』の舞台にもなりましたし、『ピクウィック・ペイパーズ』のクラブが初めて旅に出るときの出発地点です。図の通り、まだトラファルガー広場がありません。このGolden Cross亭の裏手に王立厩舎があり、それがバッキンガム宮殿の裏手に移転した後に、トラファルガー広場が建設されるのです（近くのヘイマーケットでは、本当に干し草が売られていました。この農産物市場が移転するのは1830年代です）。

チャールズⅠ世の銅像が見えます。チャリングクロスの名前の由来は、古代英語の“cierring”（＝“曲がる”。この辺りでテムズ河が大きく迂回。）とエリナー・クロス（エドワード1世が王妃追悼に建てた記念塔。現在はチャリングクロス駅前に置かれている）が融合したものです。このエリナー・クロスは1675年にチャールズII世によって、近くで処刑された父親のチャールズⅠ世像に取り替えられました。ここがロンドンの道路元標と指定され、今でもこの像を起点にロンドンからの全ての道路距離が測られています。

『タイム・トラベル』の終わりに

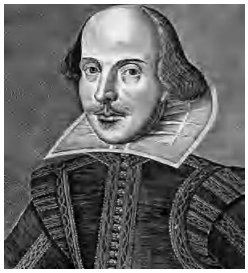
ディケンズ少年が初めてロンドンにやって来た当時の街の様子を見てきましたが、トラファルガー広場も、ナショナルギャラリーも、国会議事堂も、ビッグベンもまだありません。アスファルト舗装もなく、通りの灯りにガス燈が導入されて間もない頃です。ディケンズ少年の見たロンドンは、現代よりもずっと中世の街並みに近かったのです。

この後、ロンドンは1830年代後半から鉄道時代を迎え、さらに電燈、地下鉄、下水道等のインフラ整備が進み、未曾有の繁栄を謳歌します。世界の頂点に達した“大英帝国”の首都ロンドンの街並みは、景観も設備も何もかもが大きく変わって行きました。ディケンズ少年がこの48年後に死の床につく頃、最も光輝き、そして最も影の深かった激動の時代が彼の頭の中を走馬灯の様に駆け巡りながらも、少年が初めてロンドンを目にしたときの、あの震えるような感動は、色褪せることなく、いつまでも心に焼きついていたに相違ありません。

英国春秋劇評

『間違いの喜劇』

小川のり子



私には妙な癖がある。飛行場での待ち時間、数独をしたり、ぼんやり人々の動きを眺めたりするのは人並み、妙なのはシェイクスピアの３７の劇作を思いつくまま紙切れに書き出してみることである。これはノーザンラインのモーデンからハイゲイトまでの３２駅を、順番に諳んじて得意がるのと同じで、渡英以来、彼の作品を何本見たかと数えてみたのが始まり。ただし、いつも数点は思い出すことができない。その中に決まって登場するのが、この「間違いの喜劇」である。

いつも忘れるからではないが、先日それを観に出かけた。今回はかぶり付きの安い席が取れず、２階の後方の席だったが、劇場全体を見渡すことが出来る。休日の１月２日というせいもあり、満席の劇場はいつもより熱気をおび、少し騒々しいほどである。それは演目よりお目当ての役者を観に来た人が多いからであろうが、そのご当人とはコメディアンのレニー・ヘンリーである。実は、私自身もその一人。TV 画面に登場するそのままの彼が舞台で大暴れするのを、大いに笑い楽しんだ。ただ、少しドタバタ劇になり過ぎたと感じたのは、国立劇場という場所柄を思いやっての、つまらぬ取り越し苦労というもの。作者が活躍した１７世紀のグローブ座などは、こんな熱気のある笑いと歓声にあふれた雰囲気であったのだろう。

ここに粗筋をご紹介する。

船が難破した際、別れ別れになってしまった双子の兄弟、双子の下僕兄弟がいる。現在はそれぞれ、エフィソスとシラクサに住んでいる。兄弟の父親が、居なくなった双子の兄を偲んで同じ名前を双子の弟に、また下僕の双子の弟にも同じように付けたのが、そもそも間違いのはじまり。数年後、シラクサ住人の弟とその下僕が、エフィソスにお互いの片割れを探しにやって来る。今では模範市民として尊敬されているエフィソスの兄の妻とその妹が、シラクサの弟を自分の夫と下僕が帰宅したとして歓待。後から帰って来た実の夫と下僕を締め出してしまう。また宝石商が「ご注文の金のネックレス」と言って何も知らないシラクサの弟に手渡してしまう。美しい女性から歓待され、商人からただで金のネックレスを手渡されたシラクサの弟は、すっかりエフィソスが気にいってしまう。反面、エフィソスの兄は、妻からしめだされ、宝石商から受け取っていないネックレスの代金を請求され、払わないからと逮捕までされてしまう。結局、最後は別れ別れになっていた同名の双子の兄弟、双子の下僕兄弟が再会。周りが「ああそうだったのか」と納得する。その上、探しに来た父親にも会え、それに逃げ込んだ弟とその下僕を匿った尼僧院の院長が双子の母親と判明したりして、最後はめでたしめでたしで幕が下りる。

シェイクスピアの作品にはこのほか「十二夜」でやはり船が難破し、双子の兄妹が別れ別れになり、同じく間違われてややこしい話になるのがある。上記の作品もしかりで、登場人物はいとも簡単にだまされ取り違えてしまうが、すべてお見通しの観客はそれを見て喜びながらもやきもきしてしまう。推理小説で作者が意図的に手の内を隠し、読者をだますのと正反対であるが、観客は常に真実を知りながら、時にはだまされたり、またそのフリをしたりして、その作品を最大限に楽しもうとする。この「間違いの喜劇」は題名通り喜劇ではあるが、内容はローマの古典喜劇を下敷きにした茶番劇（farce）で、シェイクス

ピアの歴史劇、悲劇、悲喜劇（問題劇とも呼ばれる）の範疇では余り多くない作品の一つだと思う。

ハムレットがジーパン姿で宮廷をうろつき、クローディアスが携帯でハムレット殺害を指示するなど、現代風にアレンジされたシェイクスピア劇が主流になって久しい。この芝居もそれに違わず、全て現代風の設定である。娼婦の店「ハリネズミ亭」はけばけばしいネオンに輝き、深く胸のくれた上衣と超ミニのお娼さん達が男達に言い寄るシーンは、レーパーバーンかピガールか。また、ネックレスの代金を払わない双子の片割れを追って、ポリスと本物のパトカーが現れての大捕り物帖は、この芝居のクライマックスの一つ。観客も大喜びなら、舞台狭しと走りまわる役者達も、結構楽しんでいる風にさえ見えた。

ただ、それらの中で一つ気になる場面に出くわした。双子の弟を自分の夫と間違えた妻とその妹が、タオル一枚でベッドに寝そべり、若い男にマッサージをしてもらうのがそれ。帰宅後、原作のページを繰って見たが、特別な場所ではなく、そこは彼らの邸宅の中での話。ただ先刻の粗筋では端折ってしまったが、実は姉と妹の深刻な会話が展開されるシーンでもあったのだ。間違いとは言え、いきなり美人に抱きつかれ、まんざらでもないシラクサの弟だが、実は妹の方に気があり、姉が居ない間に彼女を口説いてしまう。妹の方は義理の兄さんが私に言い寄ったとこのシーンでは憤慨してみせるが、内心悪い気はせず、最後のハッピーエンドの伏線となっている。もし原作者が生きていたら、どんな顔をしたか想像してみるだけで楽しくなる新解釈“マッサージの場”であった。

各々の好みは別として、ジーパン姿であろうと、マッサージ・ベッドであろうと、パトカーであろうと新旧全てを受容し、物語の筋と妙味を失わず、観客を楽しませてくれるシェイクスピアの作品の魅力はこの柔軟性にあるのだろうと感心しつつ、帰路に着いた。

『ジューノと孔雀』（Juno and the Paycock）

ショーン・オケーシーの代表作と言われ、１９２０年代のダブリンが舞台で、非常に暗い人生の悲哀を感じさせる芝居である。偶然とは言え，前出の「間違いの喜劇」とほぼ同じ頃に観たので余計その差が著しく思えた。

一家を支える働き者の妻 Juno と、酒に浸り仮病を装って働こうとせぬ夫 Jack、男に裏切られ捨てられる娘、アイルランドの内戦に巻き込まれ殺されてしまう息子、そして最後は借金取りに家財全てを持ち去られ一切を失ってしまう一家の物語。まるで不運、不幸、不正、不実を大皿にもったような芝居である。しかし、反面、人生の悲劇を喜劇に換える能力のより顕著な、底辺に生きる人間の生命力の強さが感じられ、それがこのドラマの救いにもなっている。

ナショナル・ギャラリーにルーベンスの「パリスの審判」の絵がかかっている。ご存知のように３美神のジューノ、ビーナス、ミネルバのうち一番美しい女神にパリスが黄金のりんごを与えるという神話が主題である。この絵でジューノ（Juno）はその表象の孔雀と共に描かれている。ちなみにビーナスはキューピット、アテナは甲冑とふくろうがそれぞれに描き加えられている。面白いことにこの絵の向かい側に“審判後”の絵もかけられている。選ばれたビーナスは今まさに黄金の林檎をパリスから受け取ろうとしているが、落選のジューノは不満やるかたなきと言うより怒りの顔付きでパリスを睨みつけている。

話が脱線してしまったが、この芝居は、一家を女腕で支えているしっかり者の妻 Juno にたいし、羽だけ広げて権威は示すが何も出来ない夫 Jack を孔雀、Paycock（アイリッシ

ュ訛りの Peacock）に擬せてつけられた題名だとおもう。先刻、１９２０年代のダブリン云々と書いたが、内戦最中のアイルランド共和国の政治的背景は複雑で、それを不消化のままで観劇。その上、全場面この時代の典型的なダブリン訛りで語られたので、（それは後で分ったのだが）、ほとんどのセリフを理解することが出来なかった。前もって読んだ粗筋のお陰で、何とか物語の流れを追うことは出来たが。幕間で朦朧とした頭を冷やそうとしていたら一人の初老の男性から声をかけられた。

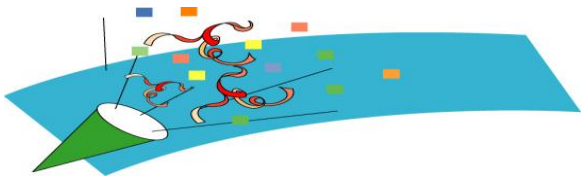
「あなた方このお芝居を楽しみましたか？それで言葉はわかりましたか？１９２０年代のダブリン訛りを聞き取るのは難しいと思うのですが・・・」と続き、暫く立ち話をした。今でも強いアイリッシュ訛りに出会うとお手上げであるが、長い在英中、こんなに聞き取りにてこずったのは、初めての芝居であった。

この一家にも一瞬で消えてしまうが朗報、“Jack の身内から遺産が入る”、がもたらされた。いつも貧困に喘いでいた彼らは急に気が大きくなり、借金で家具をそろえ、服装を整え、食器を新品にし、待望のグラマホンまで買い整えてしまう。同じ長屋に住む友人を招いての前祝で、何の屈託もなく楽しげに歌い踊る姿は、観客を不安にさせるほどであった。そして、それが“絵に描いた餅”で終わってしまったあと、以前よりも酷い状況になってしまう。現実を直視出来ないジャックはまた酒におぼれ、ジョニーは仲間を密告したかどで IRA に殺され、メリーは婚約者に捨てられて未婚の母、そしてジューノは借金取りが持ち去って何もなくなった部屋に立ちすくみ、幕が下りる。

この一家が住んでいた建物は、“Tenement　House”と呼ばれ、日本語に訳される“棟割長屋”からはほど遠い本建造物である。しかし、１９世紀の富裕層脱出に始まるダブリンのスラム化は２０世紀に入ると頂点に達し、「ヨーロッパ最悪のスラム」の汚名まで得てしまう。ダブリン市民の３分の１はこの長屋に住み、その中には倒壊寸前のも少なくなかったと聞く。一部屋に 8 人から 12 人の家族が、老朽化した排水設備と、ゴキブリが走りまわる建物で暮らし、肺病、熱病、その他諸々の病魔と貧困との闘いの日々であったそうな。しかし、反面このような逆境の中で芽生えた友情、仲間意識は強く、互助精神は非常に堅固であった。“したたかに生きる”ということは逆境に生きてのみ可能なのかもしれない。

いつか、どこかで、「人間はより悲劇を好む・・・」とあるのを読んだ気がする。
「自分より不幸な人を見て、自分を慰める」という気持ちは分らぬでもないが、この芝居のように“これ以上の不運・不幸はない”状態をみて、やりきれない気持ちにはさされても、けっして“慰め”にはならない。しかしこのドラマが私に強烈な衝撃を与えたのは確かである。平凡な人間が人生を懸命に生きようとしても、どうしようもない運命のワナに陥ってしまう。最悪の状態の中で、それでも生き続けるということは、それだけで十分感嘆に値すると言うことなのだろう。

この芝居はダブリンのアベイ劇場（イエィツ等によって設立されたアイルランドの国立劇場）からロンドンに移されてきたと聞く。ベテラン俳優達、シニード・キュサック、キアラン・ハインズの好演も手伝って、非常に密度の高い芝居に仕上がっている。そしてまた、オケーシーの戯曲が持つ魅力、底辺に生きる人間の強靭な生命力と楽観主義、が観客に与えたインパクトも強かったのではと思いつつ、半面、「当分の間は観たくない芝居」というのが本音でもあった。



五つのポエム

田村　陽子

２０１１年の暮れに、骨折して落ちこんでいた時、どういうわけか詩が浮かんできた。その時の詩。

毛糸のチョッキ　（２０１１年１２月 22 日　作）

クリスマスも間近だというのに

歩道で転倒、左肩骨折。

救急病院で手当てを受け、包帯でつっている。

こんな時、便利なのが袖なしのチョッキだ。

そういえば、この熊のアップリケの付いたチョッキを

亡夫がガンと戦っていた頃着ていたのだ。

「寒い、寒い」と言って。

もう五年も前のことである。

たかが骨折くらいで、こんなにみじめ、こんなに不自由。

だけど闘病中の夫はどんなにかつらく、

落ちこんでいただろうに、

「イタイ」とも「つらい」とも言わなかった。

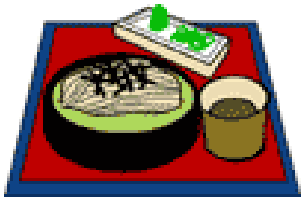
あの時の夫の気持ちを察することが出来なくて

本当にすまなかった。

ゴメンネ！

おそば　（２０１１年１２月 26 日　作）

本当に久しぶりにそばを作って食べた。



左手が使えないから、ネギもしいたけもぶつ切り。

だし昆布とお酒を少々。かつお節としょう油で

おいしいだし汁ができた。

おそばをすすりながら、ふと箸を置いた。

ああ。5 年前、夫がホスピスにいたシーンがよみがえってきた。

あの時、夫は「おそばが食べたい」と言ったのだ。

それなのに、「もうすぐ家に帰るから...」と言って

そばを作ってあげなかった。三日後に帰宅の予定だったから。

それなのに、三日後、夫はこの世の者でなくなった。

「ああ、悪かった、悪かった。」

悔いても、悔いても悔やみきれない。

5 年経った今、ケロッとして、そばをすすっている自分にあきれた。

夢　　（２０１１年 12 月 22 日　作）

母の夢を見た。

母は誰かと連れだって歩いていた。

私はブラブラとネオンの付いた町を一人でさまよっていた。

「母ちゃん!」と呼んだ。

母は私の方をじっと見て、何も言わずに消えていった。

骨折で心細くなっている私を励ましに来たのだろうか。

母がなくなってから、6 年になる。

納豆　　（２０１１年 1 月 3 日　作）

生まれて始めて、納豆を食べた。

K さんの手作りの納豆は思った程くさくはなく

やわらかで、おいしいと思った。

亡夫が大の納豆好きで、

クルクルとはしでねばりが出るまでかきまぜている時、

「くさい！くさい!」と言って鼻をつまんでいた私。

Ｋさんが「納豆は骨を強くするのョ」と言ってすすめてくれた時、

「少し下さい」と迷わず言って食べた私。

私は納豆を軽べつしていたというより、

そんなくさいものを好きな夫を軽べつしていたのかもしれない。

ディスチャージ　　（２０１１年2月２７日　作）

「 Ｍｒｓ．タムラ、今日でディスチャージ　ョ」

フィズィオ　セラピストの若い女声が言った。

「本当によくがんばったネ。もうここに来る必要ないョ」

骨折してから丁度２ヶ月。

１ヶ月間もお風呂に入れなかったことや

寝返りを打てなかったことなど、遠い昔のことのようだ。

私はうれしくなって、バスに乗り、地下鉄に乗って

ランチタイム　コンサートへ急いだ。

前から楽しみにしていたバイオリンの演奏だ。

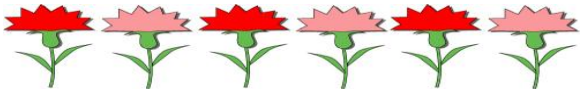
若いロシア人の女性バイオリニストが

力強く情熱的でとろけるような演奏をした。

骨折のおかげで、これまでの忙しい毎日を

のんびりした生活に切りかえれてよかった。

人生に無だなことは何もないと思った。



英国の食文化を見直す

小出重幸

「おいしいものが分からないんじゃあない、美味を追求する、ということを潔しとしないのだ」

英国の食事がおいしいか、まずいか、という議論になったとき、ジョンの説明がいちばん説得力があった。

何世代にもわたるケント州生まれで、オクスフォードの英語学科出身。ロンドンの大学で英語教育プログラムの元締めをしてる生粋のイングランド人だ。留学生仲間も交えての雑談の際に、中国人留学生が調理にかける時間が長すぎることを、嘆いた。

「授業中にイネムリをするので、何時に寝たのか聞くとみな 2 時、3 時まで起きている。しかも勉強ではなく翌日の弁当作りに時間をかけているというんだ。我われには全く理解できんね」

というジョンの主張は、「食事は、一に栄養、二に、お腹を満たせば良い、三に、彩りがあればそれで十分」という明快なものだった。

「だから、留学生にはこう言うんだ。ご飯を炊く、盛りつけた器にキュウリやトマトを切って載せ、さらに鮭かマグロの缶詰をその上にかけて、かき混ぜる――これで栄養、彩りとも十分だろう。あとは、お腹が一杯になれば完璧だ。5 分でできる……」

一方、中国人留学生のホンネを聞くと、大学の食堂は、まずくて食べられない。生野菜は身体を冷やすから、必ず火を通した野菜・根菜類を食べるよう、親からしつけられている。料理とは元来、手間と時間が必要なものなんだ――と、食養生という言葉を生み出した国ならではの返答が戻ってくる。両者の隔たりは縮まらないままだ。

味を追求しなくても食事は胃袋を満たせば、それで十分、という主張には、ある種の矜持も聞き取れる。

そういえば、「口元を常に引き締めよと（Keep a stiff your upper lip.）」という格言があったけれど、と質問を向けると、一呼吸おいた後で、「まあ、同じココロかな」との返答。「だから英国は地球の隅々にまで到達し、世界征服できたわけだね」、という私の言葉に、ジョンはうれしそうにうなづいた。

「美食を追求しない」というひと言は、これまでの先入観を覆すものだった。色々な機会に英国式食文化を疑う場面に出会っていたからだ。

シチリアの料理店では、こんなミスマッチがあった。

「このサカナは生焼けじゃあないか、焼き方が不十分だ。もう一度、焼いてくれ」

料理長にクレームをつけていたのは、「教育された」英語をお話しの中高年夫婦。くだんのシェフはシチリアなまりの英語で必死に「お客さま、そうはおっしゃいますが、この魚は極めて新鮮です。白身が柔らかいこのぐらいが、いちばんおいしいのでございますが……」と説明。しかし、「だめだ。こんな生焼け、食えるもんか」、というお客の怒りが勝り、シェフはすごすごと退場。こんどは、茶色くカリカリに焼けた魚を載せたお皿がサーブされてきた。

新鮮な魚介類とおいしいワインに恵まれたこの土地で、その醍醐味を味わわずに帰ってしまうこの夫婦が、たいへん気の毒な人たちに見えた。

アングロサクソン系とひとくくりにしてはいけないのかもしれないが、北米でも類似の体験がある。北大西洋に釣り船を出して、タラ釣りをしたときのこと。釣果を抱えて帰港すると、船長さんが魚をさばいてくれるという。同行のカナダ人の注文に応じて、船長は岸壁の即席まな板の上で、タラを 3 枚に下ろしてくれた。

ところが、内臓、皮、骨などは海に投げ捨ててしまうのだ。

すぐ真上で待ち構えるカモメの群れが、次々と急降下しては、赤いタラコもついたこのごちそうをさらって行く。
　内臓を持ち帰らずに、どうやって調理するのか尋ねると、「フィレだけもらってかえるのよ。フライパンで焼くでしょ、あとはお皿の上で塩・コショウをかける……」。下味をつけたり、内臓を使ってよりおいしくする、という発想自体がないので、やはり廃棄物になってしまうのだろう。

　こうした事情から、おいしいものが分からない――と決めつけていたのだが、「あえて求めない」というココロになると、それなら討論の土俵ができそうだ。
　禅では、「もったいなさ」をこう説明する。
　肉食も、禅の修行道場の精進料理も、いのちをいただくということには変わりは無い。問題は、自分の生存のために犠牲にするいのちを、いかに大切に扱うか、その姿勢が問われるのだ、と。
　したがって、捨てるところ無く、すべてを使い尽くす、同時に最大限の味わいを素材から引き出して、自身の健康、人生に資する――という思考になる。
　「美味を追求しない」という矜持と、「最大限に味わうことが、いのちをいただく人間の義務である」という主張――さて、その帰趨はいかに。
　久しぶりに、幾分上達した英語で、またジョンと話しを戦わせてみたいと思う。それが、英語指導教官に対する最も良い恩返しになると思うのだ。

そんな！

津久井安子

「そんな筈では・・・」、「そんな酷い!」、あるいは「そんな事って信じられない、」、これは車に乗れない私の英国路線バス体験記です。

英国滞在第一日、ヒースローからロンドン、そしてブライトンのバスの色を見た時に「イギリスでは公共バスの色は赤なのだ。」と信じた翌日、市中を悠々と走る真黄色の路線バスを見た時は「エッ！」と驚いた。
しかし其れは実害（？）が無かったが、その後刻々と変わるバスの色に出会うとは、イギリスのバスの色は本当に変化に富んでいる。
スキップトンのバスセンターで時刻表を片手にバスを待つ、時間が１０分過ぎたが一台もバスは来ない。きっちり組んだスケジュールが頭の中を駆け巡る、止むを得ず同じように待っている地元のご婦人に「A行きは此処で待っていれば良いのでしょうか」と訊いてみる。「そうよ、白いバスが此処へ止まったら乗りなさい。」ホット安心はしたものの白いバスは滞在３日間の内一度も見た事が無い。更に１０分経過、待つ時の時間は長い。そうか私の地名の発音がいけなかったのかも、と思い直し、目的地のパンフレットを見せながら場内整備をしている人に念のため尋ねると、「此処でピンク色のバスに乗りなさい。」との事。「ピンク？？」と問い直すと「そうだ。」と自信たっぷりの答え、半信半疑で２分経過、

来た。正に真ピンク！車全体が綺麗なピンク色、しかし其れは反対側の降車口で乗客を降ろし了わると、全速力で我々の前を通過し、アッと言う間に走り去った。　「ハァーッ！」と驚いたのは私ひとりだけで、他の人々は少しも驚かない。
堪りかねて予定を変更しようと思った矢先、来た！白いバスだ！しかし其れは路線ＮＯ．が違う・・・、何の変哲も無い見慣れた色のバスが来、そして静かに待っていた２０人近い人々を乗せると、何事も無かったように発車した。「？」と思っているのは相変わらず私一人。
翌日うっかり終点を乗り越し、車庫兼修理工場に運ばれた時に色の秘密が解った。ピンク、真っ白、通常と、正に色とりどりに、しかし整然と並んでいる。そこでは色あせたバスを最初にピンク色にそれから白一色に塗り、最後に上部に青、真ん中に細い白色の部分を残してから、下部を緑色に塗って化粧直し完了。但し配車の関係で途中で使わざるを得ない時には、お出ましとなったようだ。

色が様々ならドライバーも色々、住み始めて間も無くのころ終点のブライトン駅に近付いた途端、突然運転手さんが外から鍵をかけ、バスを離れて行ってしまった。ビックリした私は隣の乗客に『？』と目を向けると、彼は肩をすくめて両手を広げ『！』と答える。約５分後サンドイッチと暖かな（その日は大変寒かった。）飲み物を両手にして幸せそうな笑顔で戻って来て、そっと二つを脇に置いて乗客には一顧もくれずに、バスを発車させた。列車に遅れたらどうしようかと心配の塊だった私にとっては信じられない事で、「就業時間中でしょう。」と苦情を言いたかったが残念ながら、英語が出て来ない。驚いたのは、誰も何も言わない！それどころか、「サンキュー。」と言いながら降りてゆく。私も腹立たしさを隠して礼儀正しく降りざるを得なかった。

ある特別に忙しかった時の事、２０分以上遅れてやって来た交代要員は、着てきた自分の上着を二度も丁寧に椅子に掛け直し、それから左右のバックミラーを数回微調整し、やおらネクタイを注意深く正し、最後に髪を梳かしなおして、全く意に介する風も無く、持参のドリンクを楽しんでから結局３０分近く遅れたのにも拘らず一言も無く発車。又たった一度だけだが身の安全を守るために注意を集中しなければならなかったケースも有った。そのバスに乗り込んだ途端、何か異様な雰囲気？そして私のパスを見るや否やバスは急発進！「痛い！」と思い切り運転手席の壁に打ち付けたおでこに手をやる暇も無く、わき腹は金棒にぶち当たり、さらに足をすくわれて危うく倒れそう！アッパーデッキに行く事は思いもよらず、身近なシートに身を任す。次のバス停に止まった時には身体全体が浮き上がり、発車の時には首が後ろにガクンと引き戻された。さしも温厚なイギリス人も次第に険しい顔になり、周りの人々もぶつぶつ言い始めた。止せば良かったのについうっかり、「このドライバーはアクセルとブレーキのテストをしているのでしょう。」と言ってしまった。「ワッ」と笑いが起こり,皆慌てて口を押さえたが、ワンテンポ遅れた私は舌の先を噛んでしまった。

しかし、私は親切な沢山の運転手さんについて書きたい。
車内に置き忘れた私のスーツケースを引きずりながら追いかけてくれた人、バス停が遥か駅の下の時は私が急な坂道を重い荷物を運んでいては列車に乗り遅れると、息を切らしつつプラットホームまで二つのバッグを運んでくれた人、バスの窓越しに写真を撮っていると、道を変えて眺めの良い場所まで遠回りした上、『５分間待っているから』と乗客共々笑顔で岬の先まで行って来いと促してくれた人、余りに眺めが素晴らしかったので、買った切符の何倍も其れと知りながら乗越してから、日本人の名誉にかけて追加料金を払おうとしたが、絶対受け取らずその上折り返し点から又最初の目的地まで無料で乗せてくれた人、判りにくい帰りのバス停が何処

にあるかを交差点のど真ん中にバスを止めて、ひやひやしている私に何度も念を押しながら丁寧に教えてくれた人、私の持っている時刻表が変更前の物と知ると、自分の業務用運行表を呉れた人、今でも私が息せきって乗るまで待って貰ったり、バス停以外でバスを止め乗り遅れの私を拾ってもらう事が度々有る。
何故か彼等の笑顔は皆飛び切り素晴らしい！

あれは、コーンウオールの人里離れたバス停で時刻表の３５分前から、私の背丈にも足りない程の傾いた丸太が一本だけのバス停の脇に立って日に４往復の最後のバスを待っている時だった。
既に定刻を過ぎていたが、その間バスはおろか車一台来ない。見渡す限り人家も人のいそうな気配も全く無い、急に薄暗くなり風も湿り気を増してきた。雨宿り出来そうな大きな木は無いし、タクシーを呼ぼうにも携帯は使用圏外、歩けば次の村まで４時間以上は確実！その時だった、反対側からバスが来た、方向違いだがどこか電話の出来る所へは行けるだろうかと考え、いやもう少し待てば、と迷う。
そんな私の前でバスを止め、窓から顔を出しながら、最終バスは既に通過済みだと言い、反対方向だが乗りなさい、終点まで行った後に町まで送って行ってやるからとの事、しかしその小型バスに乗客はいない。治安の悪化を散々注意されてきたのだが，悲壮な覚悟で乗り込んだ瞬間前が見えないほどの雨が降り出した。彼は私の不安を察してか、晴れていれば此処から綺麗な砂浜の向こうに海が見える等と、ポツリポツリと観光案内までしてくれた。無事Ｂ＆Ｂに帰ると、皆が私の帰りの遅い事を本当に心配してくれていた。今でもあの運転手さんに救われなかったら、一体どうなっていただろうと思い出す度にゾッとし、そんな親切な人にあらぬ疑いを掛けた申し訳なさと、宿の前まで送ってもらいながら、お礼も十分言えなっかた自分に腹が立つ。

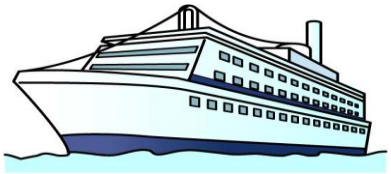
これは三年前の冬の夜、知人宅を出る時に強い風が吹き始め、バス停の少し手前で急に横殴りの雨となった。そこはポールが一本立っているだけで大西洋から吹き付ける強風に備えてハンドレイルが有るほどの場所だが、屋根も風除けも無い、モチロン傘は全く役に立たない。二分と経たない内に全身から雨が滴り落ち、身体全体がずっしりと重たくなってきた。
遠くにバスの灯が見えた、が近づいても行き先が判らないほどの雨脚、とりあえず屋根の有るバス停まででも、とほっとしたが、近付いて見ると
"Ｓｏｒｒｙ，　Ｉ　ａｍ　ｎｏｔ　ｉｎ　ｓｅｒｖｉｃｅ！"「アーだめだ」と泣きたい思いの私の前にそのバスは止まって、「何番のバスを待っているのだ。」と叫ぶようにして訊いてから、「乗れ！」と言ってくれた。今度は躊躇わず乗せてもらった。その後トップスピードで走りながら、私の待っているバスは少し前に通過した事，何とか追い付くから心配しないでシートに座れと言ってくれた上、Ｆ１レースドライバーの様な見事なハンドルさばきで走り続け、予定のバスに追いつくと、ピッタリ車を寄せ、驚いたそのバスの運転手さんに止まるよう合図し、私が乗り換えたのを見届けると走り去った。其れからは毎日バスを乗り降りする時毎に運転手さんの顔を見、似ているなと思うたびに、あの嵐の夜の人ではないかと訊いてみるのだが、未だ以って巡り会えない。せめて名前を聞いて置くべきだったと、悔やみ続けている。

急にこれ等を書きたくなったのは、先日ある日本人留学生にこの親切な二人の話をしたところ、「そんな！其れって規則違反じゃないんですか。そんな事して良いんですか！！」と、クールに返された。　あー、誰かもそんな風に何回も言っていた、・・・・!!

地中海クルーズとカサブランカ

岡村光雄

「クルーズ」とは、金持ちが豪華客船に乗り、ディナーはフォーマルウェアーで着飾り、贅沢に遊ぶとのイメージがあり、日本でも、飛鳥・日本丸等超高価なクルーズがニュースとなり、私の旅とは縁がないと思っていました。



処がヨーロッパでは、クルーズは大衆化し、乗客人口も年々増加している成長産業であり、知人の若いカップルも、値段も手頃で、豪華な雰囲気で、乗客とのふれあいも楽しめ、移動の時も、宿泊ホテルで荷物を纏める必要が無い便利さ等の話で関心が湧きました。
昨年8月ロイヤル・カリビアン社によるストックホルム・サンクトペテルブルグ5日間のクルーズは、予想以上に快適な旅を楽しめました。
今回は日本の友人夫妻の来英に合わせ、カサブランカと地中海クルーズ7日間の旅を計画。出発前のコスタ社のコンコルディア号の大事故、そして1月末より東ヨーロッパを襲った大寒波の中でスリルのあるクルーズを体験しました。
皆さまにこの旅行記を紹介したいと思います。

日本の友人夫妻と共に、1/26ロンドンの自宅から飛行機、バルセロナに3泊して1/29バルセロナ港から出発、アフリカのカサブランカ・地中海のジブラルタル・バレンシア・マルセイユ・ジェノアの各都市に寄港し、2/5バルセロナに帰港した10日間の旅です。
今度のクルーズ船はMSC社のMSCスプレンディダ。コスタ社の・コンコルディア(1月13日夜、ローマより出港後近郊のジュリオ島で座礁、死者17人を出して現在でも船長の責任が問われている船)よりさらに大きい135,000トン、乗客3200人の大型客船。2009年就航の新船です。
この船のスケジュールにカサブランカ・ジブラルタル・バレンシアが含まれ、バルセロナが出発港なのでバルセロナの観光も楽しめ、格安の冬料金に加え、内側の部屋の料金でオーシャンビュー・バルコニー付の部屋にグレードアップ出来ること等が魅力でした。
又、クルーズ寄港地では滞在時間が限られている為、滞在時間を有効に利用する為、以前のクルーズの様に総花的な寄港地観光ツアーをやめ、独自に訪問先を決め滞在時間を有効に利用しました。
クルーズの前半は天気も良く暖かくリラックスしてバルセロナ・地中海各都市を楽しみましたが、ロシア・東ヨーロッパを襲った大寒波に巻き込まれた後半は、緊迫したクルーズに一転。でも楽しくてスリルのある旅でした。
バルセロナでは2007年に訪問したとき見逃したスポットを中心に、3日間グエル邸・カタルーニア音楽堂でのコンサート・サグラダ・ファミリアでのミサ・ミロ美術館等を訪問。

サグラダ・ファミリアのミサに与かった後、バルセロナ港に向かいました。市内と港が近い為、タクシーで岸壁の最も外側のMSCスプレンディダの停泊場所まで10分程度で到着。眼前の壮観な大型客船(132,000トン・長さ330m・高さ67m))を眺めて、期待に胸がはずみました。

クルーズ船について
私達のキャビンは海が見えるバルコニー付で10階の高層階の為、外の眺望は抜群。新しい船の為部屋の調度も新しく機能的で快適でした。船内ではロビー等共有スペースも余裕があり、ラウンジ・カジノルーム・ナイトクラブ・ディスコ等も明るくシックで、くつろげ

る雰囲気。
メインダイニングは、オーソドックスなタイプと少しカジュアルな両タイプがあり、イタリアンスタイルの料理は品数も多く、程良い味でしたが給仕のサービス、オーダーの取り方、言葉の使い方等がいま一歩で、この点では前回のロイヤル・カリビアンの方が好感がもてました。
バルセロナを18:00出港した船は地中海を一路南下、翌日は終日船上。
船内にはレセプションに日本人の女性スタッフがいて、顧客サービス、毎日発行される船内新聞も日本語で配布され便利でした。今度の航海ではイタリア人とドイツ人が特に多く、次いでフランス人で、英国人・米国人はそれ程多くない様でした。
室内プールで泳いだ後に、10人程入れる円形のジャグジーに入ろうとすると、イタリア語ではしゃいでいる5人程の男女のグループ、人の良さそうなごつい感じの老人がいました。ジャグジーの中で黙って向き合っているのも味気ないと思い、英語で話かけてみましたが全く言葉が通じません。イタリアセリエAのインターミランで活躍している日本人の長友選手の話は分かったようで、イタリア人には、話は通じなくてもフットボールの話題で盛り上げるのが一番と思いました。もう一人の老人はドイツのミュンヘン出身、ドイツ語だけ話すローカルな人の様でしたが、秋のミュンヘンのビール祭りの話をしたら分かってくれました。

その日の夜フォーマルのドレスコードで食事をした後、船長と記念撮影するイベントがあり信頼できそうなイタリアンでこれなら船の操縦は大丈夫と安心しました。上甲板には、そぞろ歩きの乗客達が夜のそよ風を受けながら、これから地中海を出て大西洋に入る最終地ジブラルタル海峡の灯台の光を眺めてくつろいでいました。

カサブランカ(モロッコ)
アフリカ最大の貿易港のカサブランカ港には、朝の8:00に入港。綺麗な朝焼けで、港では大小の貨物船、岸壁には積みだし用のクレーン、倉庫等が並び、働いている作業員の姿もあり活気がある様です。
早めの朝食を船内でとり下船。既に観光ツアー参加者の為のバスが待機していました。私たちはタクシー乗り場で、カタコトの英語が話せる運転手を捜し値段交渉し、先ずハッサン2世モスクに向かいました。
モロッコの通貨はディルハムDHですが、ユーロも使えます。言葉はモロッコ語(アラビア語)以外ではフランスの植民地の時代が長かった為、フランス語が中心で英語は殆ど通じませんでした。

ハッサン２世モスク
このモスクは、大西洋に面して建てられた世界最大級のモスクです。モスク外部の敷地には8万人、内部には2万５千人が収容可能で、ミナレツトの高さも200mもあります。完成が1993年と新しい為か外壁も明るく鮮明な色です。くすんだ色の外壁と重厚さを持ったイスタンブールのブルーモスクとは対照的です。

チケット120DH(カード支払い可・ガイドツアー形式)で入場。内部が巨大なので、ドイツ語・フラン語・英語・イタリア語等の各グループは、遠くに見えます。
モスク内部は、モロッコ各地からのマホガニー・シーダー等の木を使った内壁、モロッコ絨毯の柄を彫りこんだ大理石、自動開閉式天井ガラス等、贅沢な作りになっています。翌週は重要な宗教祭事があるとの事で、沢山の人が室内清掃に携わっていました。快晴の為天井のガラスが開いていて、モスク内から眺める空の青さが印象的です。
現地の女性ガイドに「礼拝時にはこの様な広い場所が一杯になるのか」と尋ねますと、「ラマダーンは勿論、金曜日の昼間の集団礼拝のときは、外も内も一杯になる」との事。10万5千人が集まる壮大な金曜礼拝の様子を想像しました。

リックス・カフェ
ハリウッドで撮影された、映画「カサブランカ」のリックス・アメリカン・カフェをモデルにして作られたレストラン「リックス・カフェ」がカサブランカで人気との事で、尋ねました。
ハッサン2世モスクから海の見える道を歩いて15分程で到着。最近改装された為かモダンな感じがする入り口には守衛が立っていました。内部は映画と違いアラビア風の雰囲気。椅子・ピアノなどは、映画に似せているようでした。2階のバーラウンジには大型テレビがあり映画のビデオが流されていました。ドイツ人・フランス人らしきグループも入って来て、盛んに写真撮影していました。私達もビールで乾杯、ハンフリーボガードとイングリッド・バーグマンの再会のビデオ画面で記念撮影。一階のレストランには、あのピアノが置いておりましたが、夜のピアノライブでは映画の中の「As times goes by」も弾いてくれるそうです。それにしても、映画というものは、国境を越えて親しまれる素晴らしい文化と思いました。

ハッブース街(新メディナ)
カサブランカは、古い城壁でかこまれている旧メディナなどでは、昔のままに道も狭くごみごみしていますが、現在では人口400万人を超すモロッコで最大の都市です。しかし急激な成長に道路建設等のインフラ整備が追いついていない様子で、各道路は車の渋滞がひどく、クラクションの音、排気ガスなどの雑踏状態。
中心から離れた「ハッブース街」はこれとは違いフランス人によって1923年に作られた、落ち着いてセンスのある雰囲気の街で、カサブランカ市民の暮らしを垣間見られるとの事、徒歩で向かいました。
20℃に近い暑さ、強い陽射しの中、ゴミゴミした細い小道、交通量の多い大通りを身振り手振りで尋ねながら、50分程してやっと到着。学生らしき青年が私達の見せたガイドブックの写真を見て、案内してくれたので助かりました。
この街の中心のムーレイ・ユーセフ広場は、フランス式の建物とモロッコ式の古い建築様式が調和して、シックで落ち着いた感じがしました。
広場に面したカフェでは、地元の男の人たちが静かにコーヒーを味わっていました。私達もティを注文。真鍮ポットに注がれたミントティーは美味しい。僅か一人1ユーロ。広場に面したベンチには、女性たちが静かに日光浴。石畳みが続くアーケードには、カーペット・真鍮製品・スリッパ・衣類などの店が並び、カタコトの日本語で声をかけて来ますが、穏やかで押しつけがましい所がなく好感がもてました。店のはずれから住宅街に入ると野菜、魚、肉等を売る地元の屋台の店が並んでいました。5時を過ぎると、何処からともなく、みるみる内に人が集まり始め、買い物・自宅に戻る人達で混雑が増してきました。
私達も船に戻ろうとタクシーを探しましたが、生憎タクシー待ちのお客でごったがえし中々拾えません。タクシーの乗車人員は、顧客3人迄と定められているらしく、4人連れの私たちには、2台が必要で更に大変でした。何人もの地元の人が道に立ってタクシーを捕まえようとする中でやっと拾えたタクシーも、大渋滞の道路は信号がない交差点では進むのも大変。運転手のプロの技量によりどうにか戻れました。約1時間半はかかったでしょうか。出港1時間前にやっとの到着。途中どうなるかと、ひやひやの連続でした。この街の伝統文化と、発展しつつある街の活力を充分に感じる事が出来ました。

ジブラルタル

ターリックの山(ザ・ロック)
3日目の朝、8時頃になると、切り立った岩山が見えるジブラルタルの美しい岬がシルエットの様に見えてきます。この小さな岬(面積6.5k平米)が英国領ジブラルタルです。

ギリシャ神話に出てくるヘラクレス柱と言われているこの岩山(ターリックの山)は、スペインの国旗にも、使われている程ヨーロッパでは良く知られています。
9時に上陸後、真っ直ぐ街の中心ケースメイツ・スクエアに向かいます。インフォメイションで、頂上までのケーブルカーの駅を聞き、隣のバス停留所からバスに乗りました。バス運賃が無料なのには驚き。ケーブルカーに乗り約10分で標高420mの展望台に到着。天気が良く360度の展望台からは眼前に地中海・その向こうにアフリカ大陸が見え、セウタ(現在スペイン領)のアチョ山も良く見えます。ヘラクレスが大西洋の西の果てから赤い牛を連れてアトラス山を越えて戻る時、近道する為大斧で山を切り裂き、その結果地中海と大西洋がジブラルタル海峡で繋がったとの神話。イベリア半島側のジブラルタルの柱と、アフリカ側のセウタのアチョ山の両柱がヘラクレスの柱です。遥かな大西洋・アフリカ大陸・地中海の入り口のジブラルタル海峡を眺めながら、暫く神話の世界に浸りました。
船の為の国境事務所の壁には、ナポレオンとネルソンが闘ったトラファルガーの海戦の模様、第二次世界大戦でこの港を舞台にしたジブラルタル城塞での戦闘の場面等が絵画と記録写真で展示されており、英国のこの地への思い入れが良く現れていると思いました。

バレンシア
レストラン ラ・リウア

バレンシアは春の火祭り、バレンシアオレンジ等で良く知られていますが、パエリャ発祥の地でもあり、バレンシアの港は、スペイン・地中海の最大の貿易港です。曇り空の港には、昼の12時に到着しました。広い岸壁には多数の大型クレーンや、コンテナー、積み出し待ちのフォードの乗用車も並んでいました。
今日の目的は、レストラン「ラ・リウラ」のパエリャを味わう事です。
船内で昼食も取らないで市内迄のシャトルバスに乗り込みます。約20分はかかりましたが、街は緑豊かな樹木も多く綺麗で清潔。豪壮な建物のなかにもモダンな建物も多く予想以上に落ち着いた街です。インフォメイションでレストランの位置を確認、14:00からオープンするとの事で、空き時間をカテドラルの見学に当てました。日本語のオーディオガイドで一周。この街は、15・16世紀頃は、この地出身のボルデイア家の法皇も出る等重要な地位を占めていたとの事。内部の装飾品も豪華。街の落ち着きもこの時代の遺産による様です。
お目当てのパエリアのレストランの「ラ・リウア」の入り口はなんの変哲もないですが、内部は中２階と2階があり、意外と広く、タイルの壁には民芸品や焼き物の皿この店の創設者の写真も飾ってありました。既に地元のお客らしき人もちらほら。早速白ワイン、サラダ、オリーブ、シーフードパエリアを注文。大きな鍋で出てきたパエリアを一口。ライスは今までにないアルデンデでシャキシャキ、味付けもすこし塩辛く濃厚。スペインではパエリャはおかずとして食べるとの事ですが、確かにワインを飲みながら食べると更に美味しく感じました。旅を続けている同行の友人がマドリツドから、「バレンシアのレストランの方が美味しかった。」との連絡もあり、このレストランは推薦出来ると思いました。

大寒波と帰路
船室テレビで、「ロシア・東ヨーロッパを襲った大寒波が、イタリアからヨーロッパ全域に及んでいる。ローマ・ミラノは大雪。」との報道。
船もバレンシアからマルセイユに向かうころには、部屋のバルコニーにも波しぶきがかかる程の大波で甲板に出て見ると、冷たい風で吹き飛ばされそうになります。予定のマルセイユの港は、風速35m以上を記録し危険回避の為閉鎖、隣の港ツーロン港に夕方に緊急停泊。数時間後ジェノアに向かう事になりました。夜の地中海は大荒れの様でしたが大型新鋭船のスプレンディダは、揺れも少なく船内は快適でした。
翌朝到着のジェノバは、雪は積もっていなかつたものの、寒風が吹きすさみ、外気温度は0度。それでも下船だけはして、日本の古美術が要領よく展示されていたキオッソーネ東洋美術館だけは見学しましたが、あまりの寒さの為観光は打ち切り船に戻りました。

最終下船地のバルセロナには定刻12:00到着。温度は低いものの穏やかでしたので、これで今日はロンドンに戻れると空港に向かいました。すると「ロンドンは昨日から雪。今日もヒースロー空港は殆どの飛行機がキャンセルされている」との情報。
幸いスタンステッド空港は閉鎖だけはしていませんでしたが、5時間以上も大幅に遅れ、雪の空港からコーチに乗り、自宅に辿り着いたのは翌日の朝5時でした。
家で寛ぎなから、死者 500 人を出したヨーロッパの大寒波・転覆したコスタ・コンコルディアのその後の捜索報道を目にすると、今度の旅行程、無事に帰って来られたのを喜んだ事は有りませんでした。

英国春秋あれこれ

『　2012 年　』

今年は何かと忙しい年になりそう。
公の行事だけでもダイヤモンド・ジュビリー、オリンピック、米国大統領選挙と並んでいる。うるう年で 2 月には一日余分な日がもらえたが、“マヤ・カレンダー”では、この 12 月 22 日以降がカウントされていない。「えぇー、そんなこと信じているの！」と友人に呆れられたが、正直なところ、少しは気にしている。先日、片付け物をしていて、大昔にメキシコで買った“アステカ・カレンダー”なるものを引っ張りだしてきた。中央に太陽神トナティウが大きな舌を出している円形の絵図で、勿論、文字・数字の説明はない。裏に英語の解説があるが、何だかよく理解出来ない。物の本には、彼らのロング・カレンダーによれば、今年は第五の時代で、「火山爆発、食糧危機、大地震によって終わる」と記されているそうである。取り立てて目新しい災害でもないので、それだけではパニックにはならない。しかし、マヤもアステカも、この他インカもホピも 2012 年 12 月 22 日を一時代の区切り、“終末”としていることである。マヤ族は 26,000 年を大きな歴史のサイクルと考え・それを 5 等分し・今年はその最後の 5 番目で・区切りと区切りの間には大きな空白状態があり・その状態とは“壊滅的な期間”であるとカレンダーで説明しているそうである。

ここ数年、時々思い出したように「終末」を気にしていたので、「2012 年」という映画が封切られた際、早速その DVD を買い求めた。内容は全くお粗末だったが、その冒頭シーンが、イエロー・ストーン国立公園から始まった。火山爆発、マグマ噴出、地殻変動、森林炎上など次々と破壊されて行くのを目前に呆然自失。恐らく以前訪れた馴染みの場所が、消滅してゆくのを見て、自分がその場に居た時の思いと重ね合わせていたからであろうか。そして、「これが最後かも」と、イエロー・ストーン国立公園に 2 度目の旅をした。

あれから 2 年、身辺にはこれといった大きな変化はないが、“問題の日”は確実に迫っている。最近、面白いことに気付いた。私は「これが最後かも」と言うセリフを乱発していることである。そしてこの言葉は自分の意見を通したい場合、主人に対しても、他の人に対しても非常に“効果的”であることが結果として出ている。

『英国春秋』2012 年春号（No.20）
編集人　小川のり子
発行人　佐野圭作
発行所　英国日本人会
事務局　c/o ita-net ltd
37 Eyre Street Hill
London EC1R 5ET
原稿の送り先　：　ogawa@japanassociation.org.uk 又は
Mrs. M. Hodgson　492 Canterbury Way, Herts. SG1 4ED